

【完結】嵐を呼ぶうたわ  
れるものとケツだけ星  
人（うたわれるもの  
二人の白皇×クレヨン  
しんちゃん）

アニツキーブラッザー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ハクの目の前に現れた、野原しんのすけ五歳児が、ヤマトとトウスクール勢を巻き込んでドタバタを引き起こす。

\*うたわれるもの―二人の白皇―のアフターです。

\*二人の白皇の盛大なネタバレをしておりますので、ご注意ください。

\*しんのすけ登場に特に意味はありません

\*既に二人の白皇のアフター二次創作がチラホラあったので、ちよつとだけ違うのをやりたかったです。

# 目次

第1話	おらのとーちゃんと、声が似ているぞ	1
第2話	ハクとーちゃんは追いかけられて	16
第3話	モテモテのおじさんだぞ	29
第4話	コーモン様のお通りだぞ	42
第5話	ハクとーちゃんはゲスの極みだぞ	53
第6話	年貢の納め時だぞ	62
第7話	大人の飲み会はお下品だぞ	
第8話	おじさんは忙しかったぞ	79
第9話	乙女の秘密を暴露だぞ	109
第10話	世界の窓からこんにちはだぞ	131
第11話	裏切りはよくないぞ	149
第12話	お助けだぞ	164
第13話	うたわれ一家ファイヤーだぞ	176
第14話	またまた一件落着だぞ	189
最終話	おしまいだぞ	200



# 第1話 おらのとーちやんと、声が似ているぞ

同胞たちに安らかなる眠りと救いをもたらすまで、神となった自分の旅は終わらない。  
い。

たとえばその結果、大切な女の子を泣かすことになったとしてもだ。

分かっているさ。あいつの気持ちは。あいつらの気持ちは。

そしてその心にどれだけ救われたか。

だからこそ、もう自分はいいつらの悲しむところは見たくない。

今、あいつらの前に現れるわけにはいかない。

もう、自分は普通の存在とは違うモノになってしまった。

そんな自分が、あいつらと共に居ることはもうできないんだ。

そう、というより会えるわけがない。

今、会ったら絶対に殺される。

「ハクとーちやん、なんでいつもそんなお面着けてんだ？」

うん、殺されるよ。ああ、会えるわけがない。

この問題を抱えてから、その気持ちがより強くなった。

「あく、だからな、しんのすけ、自分はお前のとーちゃんではない」

悩みで痛くなった頭を抑えながら自分は言うものの、目の前の子供は変わらずに自分を「とーちゃん」と呼んで来る。

「オ、そうかそうか。ハクとーちゃんも男の子ですな。そんなお面を着けていれば浮気もし放題で母ちゃんにバレないという作戦ですな」

「主様。顔を隠してでも肉欲に溺れたいというのであれば……」

「どうぞ私たちを平らげてください。お肉、食べ放題」

「ウルウねーちゃん、サラア姉ちゃん、しゅぽ——！ しゅぽ——！ ハクとーちゃん、うらやましいぞ——！」

かつての時代、資料で見たことがある。確か、蒸気機関車か？ 顔を真っ赤にして興奮したように足元を走り回るしんのすけの姿に、自分は憂鬱になった。

それにしても、とーちゃんってどういうことだよ。

「ハクとーちゃんは、オラのとーちゃんと声は同じだけど、オラのとーちゃんよりモテモテだよ」

「声か……声ねえ……。そんなに似ているのか？」

「そだぞ。ハクとーちゃんの声は、オラのとーちゃん、野原ひろしと同じ声だよ！」

「ヒロシ……ヒロシとききたか……」

おい、兄貴。自分って結婚してないよな？　してなかったよな？　子供居なかったよな？　絶対いなかったよな？

だから、しんのすけが言ってる「とーちゃん」ってのは、「声がそっくり」で「たまたまヒロシという名前」ってだけで、自分とは何も関係ないよな？

『ようやく会えたな……ヒロシ……いや、ユウジだったか？』

常世へと旅立った兄貴の生前の冗談が、今になって利いてくるとは思わなかった。

「で、ハクとーちゃん、次はどこに行くんだ？」

どちらにせよ、自分はタタリ云々とは別に、この問題も解決しなければクオンたちに会いに行くことは絶対に出来ない。

ああ、もし勘違いされようものなら、クオンの尻尾で締め上げられ、ネコネにぶつとばされ、皇女さんにはあの大刀で……アレはシャレにならないから……本当に……

「次か……そうだな」

にしても、どうしてこうなった？

あの最後の戦いにて、ハクオロからその力と座を譲り受け、タタリ浄化のために世界を渡り歩き、その途中で発見した遺跡とゲート。

まさかそのゲートが突如誤作動を起こしたと思つたら、坊主頭の五歳児の子供『野原しんのすけ』が、自分たちの目の前に現れた。

ゲートはこの子を転送して以降、ウンともスンとも言わなくなり、更にはこいつの家も帰り方もまるで分からないということもあり、結局こうやって連れて歩いている……おかしい……自分は神様になって大抵のことが出来るようになったはずなのだが……「まあ、とりあえずは起動可能なゲートに行かないとな……だから次は……オンカミヤムカイ……：始まりの国……：出来れば最後にしたかったんだけどな……」

オンカミヤムカイ。かつてハクオロが封印されていた地。

「あそこはトウスクールとも懇意だし、特にあのウルトリイさんは、すべてを見透かしているかのような感じだからバレないように行けるか？ でも、あそこにはゲートもあるから、しんのすけを帰せられるかもしれないし……行くしかないか……でもな……」

タタリ浄化の旅は、もはやヤマトどころではなく、海を越えた地にまで自分の足は向いていた。

海を越えた大国トウスクールを中心とした大陸。

今、自分はヤマトを離れた地に居た。

「は、実体化しないで透明化して移動できたら楽なんだけど、しんのすけは出来ないから自分も実体化で歩き回らなければならぬ……でも、この大陸はかつてハクオロが居たこともあって、自分が今つけているこのハクオロの仮面は非常に目立つ……トウスクールの関係者に見つければ一発でバレる……そうなると、トウスクールの女皇でもあるクオ



ンの耳にも……」

そして、ようやく眼前に巨大な遺跡を利用して作られた建造物と、その下に広がる街が見えて来た。

「大きい建物だぞ、ハクとーちゃん。なかなか赴きがありますな〜」

「ほう、しんのすけにも分かるか？」

「おお、ハクとーちゃん、見て見てー！　なんか、空飛んでる人居るぞ！　アクション仮面の新しい怪人？」

「あつ、いや、あれはオンカミヤムカイの人の特徴で……まあ、羽が生えてるヒトが居るんだよ」

「ほうほう。これまで犬の耳のお姉さんとか、猫のお姉さんとかも居たから、あそこには天使のお姉さんも居るのか？」

「そりゃーな。それこそウルトリイさんなんて女神のような金髪美人で胸もでかくて……」

「ツ！　えへ〜、それは楽しみだゾ。父ちゃん、この世界、いいところですよ〜」

「ああ、だろ？　つて……お前、ものすごいしまりのない顔してるが……本当に五歳児か？」

ウィツアルネミテアの総本山でもある、オンカミヤムカイ。

大神ウィツアルネミテアの教義を守る宗教国家でもあるこの国に、まさか、その大神本人が来るのを躊躇ってしまうというのも皮肉な話。

でも、危険が伴う旅にこれ以上、しんのすけを連れまわすのも難しいし、あんまりのんびりしていたら二度と会わないと決めていたクオンたちにまで感づかれてしまうかもしれない。

だから、ここは……

「じゃ、ハクとーちゃん、オラ、町の中を探検してくるぞー！」

「ん？ って、お、おい、しんのすけ！」

って、そんなことを考えていたら、しんのすけが走って行っちゃったぞ！ しかも早い！ 前々から思っていたけど、五歳児でありながらあの行動力と運動能力は一体どういうことだ？

そして、短い付き合いでも分かるほどの、あのしんのすけという子供のトラブル体質。放っておけば何かとんでもないことが起こる気がする。

そうやって、慌てていた自分は、「何故か賑やかで騒々しいオンカミヤムカイの様子」にはまったく気づかずに、しんのすけの後を追った。

そう、オンカミヤムカイの中にあるとある茶屋で……

「にしても、どうしてアンジュは会談をココにするかな？ ヤマトの帝が来訪するからって、オンカミヤムカイは大騒ぎじゃない。ココの見張りは私に任せてくれればいいって、何回も言ってるかな？」

「何を言う！ 神となつたハクの手がかりがあるかもしれないのなら、余は地の果てまでだつていくのじゃ！」

「帝。そう言つて疎かになつている政務は後でキツチリとやつてもらいますからね？」

また、後ほど到着されます、トウスクルの始祖皇であるハクオロ様へのご挨拶も小生と……」

「姉さま、ごめんなさいなのです。ただ、兄さまがひよつとしたら……そう思つたら、私もココに来たいという想いにウソはつけないのです」

「私も、ハク様がひよつとしたら……そう思つたらいてもたつても居られずに……」

「そうやえ、クオンはんの本当のおとーさんは、ずっとこの国の下におつたんやろ？ せやつたら、おにーさんもおるかもしれないと思うんよ」

「そのとおりだ、クオン！ 抜け駆けを見逃さずに自らも積極的に動くのが、良い女の条件だ！」

「あんしんしろキウル。キウルがどこかにいてもシノノンがおこしにいつてやるぞ」

「く、羨ましいじゃない、キウル」

「はく、でも、こうやって僕たちが揃うのって久しぶりですね」

「ええ。それほど時間も経っていないようで、僕も懐かしく思います」

「ええ。だから、クーちゃんもせつかくまた会えたお友達を前に、そんなことを言ったらダメですよ？」

クオン、アンジユ、ムネチカ、ネコネ、ルルティエ、アトウイ、ノスリ、シノノン、ヤクトワルト、キウル、オウギ、フミルイル……

とりあえず、なんやかんやで全員集合していた。

そしてそこに……

「オオー綺麗なおねえさんがいっぱいだ——っ！」

コレが現れてしまった。

トウスクル皇女とヤマトの帝が、庶民が行き交う町でのんびり茶屋でくつろいでいる。

その状況に、町の者たちは遠めで眺めているだけしか出来なかつたが、そこに一人の子供が乱入した。

「ほうほう、……合コンですな〜？ う〜む、しかし男女の人数が一緒じゃないと。なら、ここはオラが参加して人数合わせましょ〜」

いがぐり頭の小さな少年。そして今その場を集っている者たちの存在がどのような者たちなのかも知らずに接してくる子供に、クオンやアンジュたちは少々驚いて反応に困ってしまった。

だが、その場に現れた少年、しんのすけはクオンたちの返答を聞かずにそのまま、その輪の中に入って腰を下ろした。

「えへへ、おつす、オラ、しんのすけだゾ。おねえさん、お名前は？」

「む？ あ、そ、その、小生はムネチカというものだが……その、童よ……」

「ほうほう、じゃあ、ムネちゃんですな〜」

「むむ、ムネちゃん？」

「ムネちゃんのオムネはボインボイン、ついでにモモちゃんもむっちむち〜」

現ヤマトの忠臣の一人にして、武人としても名高いムネチカ。その存在を相手に「ムネちゃん」と言いながら品のない顔で歌い出す子供。その状況に、オンカミヤムカイの者たちは卒倒しそうになった。

「な、なん、なのかな、この子？」

「なんとという品のない幼子なのじゃ！」

「まったくです。親の顔が見てみたいのです」

突然現れ、突然驚きの言動を繰り返すしんのすけの姿に、クオンたちはどう反応して

いいかが分からず呆気に取られていた。

ヤクトワルトだけは笑っていたが……

すると、その時だった。

「ちよ、ちよつと君！ ま、待つかな！」

「おっ？」

その時、クオンが何かに気づいてしんのすけの両肩を掴んだ。

勢いよく。

その勢いにビックリしたしんのすけ。眼前には恐い顔をしたクオンが真剣な眼差し

で……

「も、もう、強引なのね。でも、オラ……そういう積極的なのに弱い……ん〜！」

「ひっ、ちよ、ちがーう！」

思わず自分は口説かれていると勘違いしたしんのすけは顔を赤らめて唇を突き出す  
が、クオンが慌てて制止。

そして……

「やっぱり……あなたの耳……間違いない……あなた……大いなる父（オンヴィタイカ  
ヤン）……」

クオンの発言に、場が一斉に凍りつく。

「な、なんツ!？」

「オンヴェイタイカヤンって……それって……」

「そうなのです。兄さまと……あ、兄さまと同じなのです!」

「オシユトル……いいや、ハクと同じ!」

ヒトではなく人。この世を創生した大いなる父である、既に滅んだ種族。

そしてその存在は、彼ら彼女たちにとっては、決して忘れられぬ一人の愛すべき男の存在と直結するもの。

「ハク? オオ。おねーさんたち、ハクとーちゃんの友達?」

「「「「……えっ?」」」」

そして、そこから更に続けざまに放たれた爆弾に、もはや世界を救った英雄たちは啞然とするしかなかった。

「ハク……ハクツ! ハク!? き、君、ねえ、君! ハクと、ハクを知ってるのかな!？」

ハクが、ねえ、ハクを！」

血相を抱えて身を乗り出すクオン。その形相はもはや冷静さ等、微塵もなかった。

「答えよ、童！ ハクを知っているのか？ ハクを見たのか？ どこにいるのか知っているのか！」

「教えて欲しいのです！ ハクさん……兄さまが！ 兄さまのことを！」

「ハク様が！ 御願ひ、教えてください！ ハク様は今どこに！」

クオンだけではない。アンジユ、ネコネ、ルルティエ。そして他の者たちも全員身を乗り出して、しんのすけを取り囲み、その尋常ならざるプレッシャーに、しんのすけも思わず身を仰け反らせる。

「な、なんなんだ、こ、恐いぞ！ そ、それに、は、ハクとーちゃんが何かをしたのか？」「いいから、ハクは！ ハクはどこかな！ どこに居るのかな！」

「どこって、さつきまで一緒だったゾ。オラ、探検するっていつて置いてっちゃったけど……」



さつきまで一緒に居た。それはつまり、「今この国に居る」ということになる。

その言葉を聞いてしまえば、もはや、落ち着けと誰が言っても無意味。

しんのすけがどうかなど、もはや小事。

ハクが居る。この国に今来ている。

それが分かっただけで……

それだけで……

「ハクとーちゃん？　なんだ、おまえはハクのことなのか？」

そのとき、一人冷静なシノノンの何気ない言葉に、クオンたち（女性陣）の肩が大きく震えた。

「おお、ハクとーちゃんはハクとーちゃんで、オラの父ちゃんは野原ひろしだゾ」

ハクはあくまで「とーちゃん」と呼んでるだけで、自分の本当の父は「野原ひろし」と説明したかったしんのすけ。

だが……

「ヒロシ……その名前……聞き覚えあるかな……」

顔を俯かせ、前髪で瞳が隠れて表情を伺えないクオン。

しかしその背には、闇の瘴気のような禍々しいものが溢れていた。

「アンジュや皆にも言ったよね？ アンジュのお父様……つまり前帝は大いなる父であり……そして、ハクのお兄さんだって……」

「むっ……そ、そういえば……」

「私、聞いたことあるの。帝はその時、ハクのことを……ヒロシって……」

その時、帝の様子から「アレ？ ユージだったっけ？」と言っていたので、名前については冗談なのだろうと、クオンは大して気にも留めなかった。

しかし、今のしんのすけの発言で、ハクの真名は本当にヒロシであり、そして目の前に居る子供は……

「しんのすけくん？ その、ハクとーちゃんはどこに居るのかな？ カナあ？」

ニツコリと微笑んで優しく尋ねるクオン。

だがその笑顔に、しんのすけは思わず恐怖ですくんでしまった。

そしてその笑顔と似たような表情の女性陣のプレッシャー。

それを受けてしんのすけは体をブルブルと震わせながら……

「え、んと、えと、ど、どこって……わ、わかんないぞ……た、たぶん、ハクとーちゃん

は、ウルウ姉ちゃんと、サラア姉ちゃんと、お楽しみだゾ」

その瞬間、クオンたちの握っていた茶器が粉々に粉碎された。

「急いでウルお母様に国を封鎖してもらうかな？　そして、バナウイとクロウにも動いてもらって……」

「ムネチカ！　今すぐ、ミカツチにも召集をかけるのじゃ！　蟻一匹すらこの国から出られぬ包囲網を作り、ハクを確保する！」

そして立ち上がった『二人の白皇』による号令が下された。

大神ウイツアルネミテアの教義を守る宗教国家でもあるこの国にて……

「これより、神狩りを行う！」

「「「応ッ！」」」

その前代未聞の号令に、仲間たちはその瞳に魂を宿らせて立ち上がった。

## 第2話 ハクとーちゃんは追いかけているぞ

大封印。

突如として、オンカミヤムカイの周囲に巨大な結界が張られた。

体が重い。力が押さえつけられる感覚。

どうしてこうなった？

「主様。さっそくバレた」

「しんのすけが、偶然この国に訪れていたクオンさんたちに遭遇しました」

思わず、「えっ？」と言ってしまった。

「神狩り」

「オンカミヤムカイの術士たちが国を挙げて巨大な結界を張りました。そして、トウスクルとヤマトの兵たちが街中を駆け巡っています」

待て待て待て待て。何で、オンカミヤムカイにトウスクルとヤマト？ しかもクオン

……たち？

「偶然会談」

「皆さん、おそろいのです。いかがいたしましたでしょうか？」

いや、どうするもこうするも……逃げないと……

「逃げるには結界を解除する必要があります」

「私たちだけでは無理」

「術を解いてももう必要がありません」

「術士は一人じゃない」

「術士の周りには護衛の兵たちがついております」

「死角なし」

でも、逃げられない！ まずい……まずいことになった……

「ととと、とにかくだ！ 今、自分がクオンたちに会うわけにはいかない！ ほら、神様が気軽にホイホイとヒトの前に現れると力が段々失われるからな……」

この世のタタリに救いを……かつて同じ時代に生きた者たちを……

「そのためにも、と、とにかく逃げよう。それで、隠れるぞ！ クオンたちには会えない！」

やるべきことがある。そして、自分はもう死んだ人間。

だからあの時、あいつらに今生の別れの意味も込めて、最後の言葉を贈って別れた。

そんな奴がホイホイと現れて「神様になって復活したぞ♪」なんて……なんか……恥ずかしいだろ……

「おやおや、随分と聞き捨てならないことを口にしますね」

「お嬢をこれ以上泣かせるってんなら、多少の怪我ぐらい覚悟してんだらうな？」

その時、なにやら聞き覚えのある声が聞こえた。

そして、この空気。その場に存在するだけで感じ取ることが出来る、圧倒的な「武」の匂いを発した武士たち。

「えっ……？」

振り返るとそこには、トウスクル兵たち数十名を引き連れた、トウスクルが誇る二大戦力。

「女皇の言葉を聞いたときは半信半疑でしたが……この国にいらつしやったのですね……オシユトル殿……いや、ハク……でしたね？」

トウスクルの侍大将ベナウイ！

「さあ、捕まってもらうぜ。抵抗したって構わねーぜ？ あんたとは前々からやりあつてみたいと思つてたからな」

戦狂いのクロウ！ いや、待て待て待て！ いきなりこんな奴らがどうして？

誤魔化す？ オシユトルの時みたいに顔を仮面で隠しているし、ここは……

「な、なんにやもか？ ち、朕はそんな名前じゃないにやも！」

誤魔化せるか？ と思つたら、ベナウイとクロウから明らかな殺気みたいなのが！

「我らが魂魄を捧げし主が、その仮面をあなたに授けたということは既に聞いております」

「つか、その喋り方にはぶつた斬りたくなるような縁があるから、逆効果だぜ？」

ハクオロの奴、告げ口しやがったな！

いや、待て待て！ 今の自分は術によって力が全然使えなくて……待てええええええええええ！

「はああああああああつ！」

「ずおりやああああああ！」

——十秒後……

「私たちも術が使えない」

「申し訳ありません、主様」

アツサリと捕まった。

自分とウルウルとサラアナの三人は両手を縄で縛られ、両足首も縄で縛られて、立って歩くことが出来ない状態だった。

「随分と楽でしたね」

「つか、術で力が抑えつけられてるんだったな」

くそ！ ベナウイとクロウが哀れんだ目で自分を見下ろしている。神なのに！ 神なのに！

「とりあえず、お嬢を呼びますかい。久々、感動の対面つてことで」

「ええ、それがよいでしょう。ただし、ハク殿……数発は殴られる覚悟をされた方がよいでしょう。みなさん、色々と思うところがあるようですので」

まずい！ それに、この騒ぎで民衆も様子を伺うように集り出して、周りが人垣で覆われている。

おまけに、手足も縄で縛られて、力も封印された状態でこの二人やトウスクール兵から逃げることもなくて……

「で、大将。ちなみに、お嬢にこいつを会わせた後はどうすんですかい？」

「どうするも何も……決まっています。トウスクールに連れ帰ります。女皇はこれまで縁談を片っ端から断ってきましたが、これでお世継ぎの心配もなくなるでしょう」

「ああ、そういうことですかい。しかし複雑になりやすね。これまで総大将からお預け



くらっていた姉さん方たちが、獣のように総大将を襲って、もうしばらくすりゃあ、お嬢に弟か妹がって時に、お嬢の御子ができるかもしれないねーってことですからねえ」

「ええ、これで我がトウスクールも安泰ということですよ」

「こいつなら、お嬢どころか、総大将や若大将からも文句は言われねえ」

「おまけに、頭も回り、政務にも問題なく対応できるでしょうから、よき皇となるでしょう」

「いやいや待って待って。随分とサラっとこの二人はとんでもないことを話していないか？」

クオンたちに合わせるために自分を捕まえたのは分かるが、その後にトウスクールに連れていくって……

「ま、待て！ 自分はそんなこと——」

「ギロリ！」

「ひっ！」

強烈な殺気に睨まれて、全身が震え上がった。なんてことだ！ ブライやミカズチとだって勇敢に戦ったのに、娘のためなら羅刹のごとき鬼にもなろうという二人の気迫がどうしようもない！

「ヤマトの総大将を、勝手な引き抜きなど許されると思っっているのか！ トウスクールよ

！」

その時だった！

空気が震えている。

肌にバチバチと弾けた空気が当たる。

その声、その空気、そしてその存在感は、かつて何度も死闘を繰り広げた……

「ようやく見つけたぞ！ オシユトルウ！」

閃光が目の前で弾けた。

気づけば、横たわる自分の目の前にはあの男が居た。

「ミ……ミカツチ！」

ヤマト八柱将が一人。左近衛大将。ミカツチ！

稲妻のごとく鋭い眼光と、大戦が終わろうとも些かも衰えを見せないその武の香り。

相変わらず……

「これはこれは……ミカツチ殿……ご無沙汰しております」

「ふつ、トウスクルよ。先にこやつを捕まえたことは実には大儀であった。しかし、我らヤマトに断りも無く、随分と不届きなことを企んでいるようだな」

ミカツチが相對するようにベナウイとクロウの前に立つ。

その好戰的な睨みと、弾ける空気を浴びながら、ベナウイは靜かに、クロウは二タリと笑みを浮かべる。

「不屈き？ 彼はもはやオシユトルの役目を終え、我らが女皇と共にトウスクルの永劫の繁榮をもたらすための役目を新たに請け負うことは既に決定事項なのですが？」

「そうだぜい、ミカツチの旦那よ。人の恋路を邪魔する奴は、ウオプタルに蹴られることになるぜ？」

「笑止！ オシユトルであれ、ハクであれ、大いなる父であれ、大神であれ、この者は我がヤマトの帝の半身！ それを引き剥がす等、貴様ら、我らヤマトと戦を始める気かッ！」

ヤバイ！ なんか、一触即発に！ 下手なことをしたら、こいつら、いきなり戦いだすんじゃないだろうな！

こんなことでヤマトとトウスクルが戦争に……いや、でも、……今……こいつらの視線は自分から外れている……この隙にどうにか……

「おお、ハクとーちゃん、そんなところで何やってんだ？」

その時、群がる民衆や兵たちの視線を掻い潜つて、小さな子供が自分の前に……しんのすけ！

「しんのすけ！ お前！」

「それより、ハクとーちゃん。何だか恐いおねーさんたちが、ハクとーちゃんの場所を教えろって追いかけてくるんだ。なんかしたのか？ オラ、逃げて来ちやっただぞ」

「な、なにいつ！ って、恐いお姉さんって……」

間違いない。クオンたちだ！

「このままここに居たら、せつかく和睦を結んだこの二国だつて大変なことになる。

何とかして逃げないと……」

「おい、しんのすけ！ なんとかか、この縄を外せないか？ 動けないんだ！」

「えー、なんか硬そうで難しそ——」

急いで、しんのすけに、自分とウルウルとサラアナの縄を解かせようとした瞬間……

「「何をやってんだ（されていいるのですか）？」」

一触即発だった、ベナウイとクロウとミカズチが、青筋浮かべて剣と槍を自分たちの前に突き刺してきた！ バレた！

「ちっ、く、くそお！」

「逃げられると思つていいるのですか？」

「あんまり手荒なことさせるんじゃねえよ？」

「貴様ともあろうものが、あまり失望させるなよな？ ……というより、何だ、この小僧

は？」

流石に目の前に三人の屈強な男が殺気と真剣をむき出しにしては、子供のしんのすけも顔を青ざめさせている。

「……ねえ、ハクとーちゃん、おら、なんかこの国恐くてやだぞ。早く逃げるぞ」

「いや、だからしんのすけ、自分もウルウルもサラアナも手足を縛られて逃げられな……」

「え〜？ それなら、手も足も使わないで動けばいいぞ？」

「な……なに？」

手も足も使わないで……？ どういうことだ？ ウルウルとサラアナも理解できていないのか小首をかしげている。

すると……

「こうするんだぞ。うんしよ、うんしよ……」

しんのすけが腰を地面に下ろして座った。尻を地面につけながらも、両足だけ浮かせて……

「秘技！ ケツだけ歩き〜！」

「「「「な、なにいいいいいいいいいい！」「」」」」

それは、正に目から鱗だった。あまりの驚愕の事態にベナウイたちも、周りの民衆たちも驚きの声を上げている。

「そうか！ 手も足も使えないなら、ケツで歩けばよかったんだ！」

「そうか、その手があつた！ って、できるかあああああ！」

「えー、じゃあ、おいてつちやうぞ？」

ぐっ、くそ、ケツで歩けだど？ 一体この世界でその発想ができる奴が何人いる？

でも、しんのすけはできているし……

「ええい、もうやけだ！ 自分たちも行くぞ！ しんのすけに続け！ ケツで道を切り

開く」

「主様は私たちの臀部の開発をこそ所望」

「主様が開けとるのであれば、臀部を主様に開きます」

ウルウルとサラアナに視線を送る。すると二人も自分に「了解」と頷き返してきた。変な意味で理解しているようだが、無視だ。

そして今、しんのすけの存在のおかげで、今、回りは混乱状態。

今なら、いける！

「きゃあああああ！」

「いやあああ、な、なにこれ、お、恐ろしい！」

「新たな禍曰神！」

しんのすけに続く自分たち。

「う、お、い、意外にできるものだな」

「私たちもできた」

「私たちのお尻にも主様のため以外に使い道がありました」

それは未だかつて見たことのない行進だったのだろう。その不気味な行進に驚きと恐怖を抱いた民衆たちが道を開ける。

逃げられる！

「ッ、しまった！ 追いますッ！」

「な、に、に、逃がすかア！」

「ッ、なんてやつらだ！ だが、逃がすと思ってるのか！ 雷駆ッ！」

だが、あの三人だけは、驚いたまま自分たちを見逃すほど甘くは無い。

ベナウイ、クロウ、ミカツチの三人だけは直ぐに自分たちの後を追いかけて走つてくる。

だが、この好機は逃さない、必ず逃げ切る！

「このまま突っ切るぞ！ 我こそ、うたわれるもの！ 神様なめんなー！」  
「ほっほほーい、ハクとーちゃん気合入ってるぞー！ じゃあ、ご一緒するぞー！ うたわれ一家ファイヤーっ！」  
「「ファイヤーッ！」」

そうだ、行くぞー！ ファイヤーッ！



## 第3話 モテモテのおじさんだぞ

「いざ、参る！」

「どこ行こうとしてやがる！」

「逃げられると思ってるのかア！」

ヤバイ、捕まる！ 速度が違う！ ミカツチの大剣が振り下ろされる！

「ハクとーちゃん、危ないぞ！ オラに任せろオー！」

もうこれまでか？ そう思ったとき、先頭を駆け抜けていたしんのすけが突如止まり、振り向き、そして何を考えたのか、ミカツチに飛び掛った。

「あ、危ないぞ、しんのすけ！」

振り下ろされたミカツチの剣に向かって飛ぶしんのすけ。

ミカツチも予想外だったのか、慌てて剣を止めようとするも、止められない。

このままでは、しんのすけが斬られる！

だが、

「必殺、ケツだけ取り〜！」

「……な、ば、バカなツ！」

ヤマト八柱将にして双壁。最強の武士ミカツチの剣を……いつの間にか下穿きをズリ降ろしてケツ丸出しになっていた、しんのすけのケツで、白刃取り……

「うそおっ！」

いやいやいや、そんなバカな！ ミカツチの剣をケツで白刃取り？ そんなことができるのか？

「こ、小僧、き、貴様ア！ 何者だア！」

「必殺、おならカウンターツ！ ア〜ンド、おならジェットー！」

——ぶっ！

「ツ、ぐはあっ！」

さらに、その状態から、おならをしやがった！ ウソオ！ その屁をくらって、ミカツチがよろめいた！

そして、その屁の勢いで、しんのすけの体が前方へ飛び、自分たちを再び追い抜いて前へ行った。

「お、おいおいおいおい、なんだそりやあ！ つつ、目が染みる！ 俺よりもスゲエ威力だ！」

「なんとも品のない……しかし、子供といえども侮れません！ 待ちなさい！」

さらに、そのおならの威力はすさまじく、クロウとベナウイにまで影響を及ぼしや

がった。

これは、正に神をも凌駕する御技！ しんのすけ、一体何者？

「おーい、ハクとーちゃんも、おならターボで加速しないと危ないぞ〜！」

「出来るかーっ！」

「主様の放屁。空気に流すの勿体無い」

「全て自分たちが吸い込みます」

しかし、あの三人を足止めしたのは大きい。このまま逃げ切つて、後はこの手足の縄さえ解けば……

「うわあああ、な、なんなんだこいつらはー！」

「禍日神が来るぞーッ！ 逃げろーっ！」

いやあ、ホントすまない。平和なオンカミヤムカイをここまで騒がせるつもりは自分にも無かつたんだ。

信心深い国で、大神たる自分がこうして恐れられるのは非常に罪悪感を感じるが、許してくれ、民よ。

そう思いながら、自分たち四人はケツだけ歩きで駆け抜ける。

すると……

「しんのすけ、前方によそ見している人が居るぞ！ 危ない、ぶつかるー！」

「えっ？ お、おお、危なかったぞ」

その時、誰もが自分たちを怯えて道を開ける中、どういうわけかこつちを全く見えない人が前方に立っていた。

「ふう、はあ、はあ、はあ、何故か大騒ぎがあつたおかげで助かつた……このまま隠れていれば……ッ！」

その人物は、まるで皇族が身に纏うような立派な衣を纏つた、自分と同じぐらいの長髪をした男。

なにやら息を切らせて、何かから逃げて来たかのように様子。

そして、眼前まで迫つたしんのすけと自分たちの存在に男がようやく気づき、思わず飛び退きそんな顔を浮かべるも、その男が自分と目が合つた瞬間……

あの男……アレ？

「き、君は……」

「あ、あんたはッ！」

「ハクツ！」

「ハクオロツ！」

何かから逃げるように自分たちの前に突然現れた男。

それは、かつて大神として十数年間地の底に封印されるも、ようやく解放されてただ

の人へと戻った男。

トウスクール始祖皇にして、クオンの実父でもある、ハクオロ——

「ハク！ き、君はここで何をしている！ それに、な、なんなんだ、その姿は！」

「あんたまで何でこんなところに！ くそ、トウスクール総動員で自分たちを追い詰めようとは……」

まさかこいつまで居るとは思わなかった。そしてまずい。自分が受け取った力は、全てこいつから受け継いだもの。

こいつは大封印をされていたから使うことはなかったものの、今、自分が持っている能力や力を全て知り尽くしている。

こいつにまで出られると……

「ツ、あ、危ない！ とにかく、こっちに隠れるんだ！」

「えっ？」

だが、ハクオロは意外にも、慌てて自分たちを引つ張って物陰へと連れ込んだ。急なことでワケが分からず、自分たちは思わず目を丸くしてしまった。

「ハクオロ？ あんた一体……」

「しっ、静かに！ そして気配を隠すんだ。でなければ、見つかる」

そして気づいた。物影に隠れながらも、大通りの様子を恐る恐る伺うハクオロ。その

額には尋常でない汗をかいている。

まるで、何かに怯えて逃げているかのよう……

「ぎゃあああああ、禍日神が他にもーっ！」

「賢大僧正（オルヤンクル）が憑かれてご乱心〜！」

大通りから再び悲鳴が聞こえてきた。

さつきまでは自分たちの所為で街は混乱に溢れていたが、今は？

すると、その時、空が段々暗黒に蝕まれていつているのが分かった。

何か黒い瘴気のようなものが空気を漂い、その空気を纏った何者かが街中をうろついている。

この禍々しいものは一体？ まさか、本当に禍日神？

「ハア〜クウ〜オ〜ロさ〜ん、逃げられると思っっているんですか！ どこですか！ もう逃がしません！ 馬車の中で、随分とウルトリイ様とお楽しみだったようですね〜！ それに、どうしてカルラさんとトウカさんまで混ざっていたんですか！ どうして私には声をかけてくれなかったんですか！」

「主様ア〜！ 逃げられると思っっていますの〜？ 十年以上も放置されていた罪はまだまだ償ってもらいませんかといけませんわ〜？ たった、八回程度の契りで逃げ出せるな

んで、考えが随分甘いものですこと」

「ハクオ口様……いいえ、ハクオ口！ あなた様が帰還されてから、どれだけ私が全てを投げ出してでも会いにいきたくったか！ ようやく再会できたあなたの腕で、どれだけ抱かれたかつたと思っっているのです？ まだまだ足りません！ さあ、私をマーマにしてくださいまし！」

「聖上〜！ 某は〜！ 某は〜！」

「おじさま〜！ もう逃がさないからね〜！ お姉さまばかりずるい！ クーちゃんに腹違いの妹をカミュも作ってあげるんだから！」

「おとーさん。アルルウも、大人の女になった」

アレがこの国に現れた禍日神！

にしても、全員あれが本性なのか？ エルルウさんもウルトリイさんも、あんなに恐くて……ライ……

「……ハクオ口……」

「ツ、な、何も言わないでくれ、ハク！ このままでは……せつかく帰還したというのに、私はすぐに常世にいつてしまう！」

「いや、あんたは十年以上も引きこもっていたんだから、それぐらい応えてやれ！ 男の

甲斐性だろ！」

ジト目で睨むと、ハクオロは顔を青ざめさせながら俯いていた。

ウルウルとサラアナが「ジーっ」と自分を見てくるが、それは気にしない。

とりあえず、今のうちにこの縄を解いて、自分たちも早々に逃げ——

「ハクとーちゃん、このおじさんと知り合い〜?」

と、しんのすけが呟いた瞬間、顔を青ざめさせていたハクオロが急に眼光が鋭くなった。

「ッ、とーちゃん……だと? ハク、まさか君はクオンというものがありながら!」

「ち、違う違う! そんなんじゃないよ!」

「というより、何故、君まで逃げている! いつまで、クオンから逃げ回る! というより、今ここで君を捕まえればその手柄で私のこともウヤムヤに……!」

「いや、待て待て! 早まるな、ハクオロ! って、しんのすけ、何度も言わせるな!

自分はお前のとーちゃんではない!」

思わずハクオロに胸倉つかまれる。元大神でも大国の始祖皇といえども父親の顔している。

だが、そんな風に騒いだのが運のつき。

「あらあら、こんなところに居ましたの?」



自分たちは建物と建物の間の路地裏まで入って隠れていた。

だというのに、突如起こった轟音が自分たちを挟んでいた二つの建物を両方爆発と共に吹き飛んだ。

「えっ？」

「お、おお、なんだ！　また新しい怪人か！」

恐る恐る声の方向へ顔を上げる自分とハクオロ。

するとそこには、両拳を突き出した状態で、満面の笑みを浮かべている、白桜閣の女将さん！　カルラさんが！

「あら？　あらあら。これは面白いですわね。女を泣かせ続けた男が二人揃って、何をしていますの？」

自分もバレたあああああああああああああ！

「あなたまで……私たちの娘を泣かせ続けているあなたまで居たとは思いませんでした。ハクオロさん、その方と何をしているんですか？」

「嗚呼、我らが大神。安らかな眠りだけでは生温かったようですね」

「なんと！ 聖上だけでなく、貴公まで！ 大人しくしろ。クオンのため、この場で斬……捕らえる！」

「そうだよ、ちよくつとお仕置きしちやうよ。おじ様と一緒にね♪ あのととき、クーちゃんをあんなに泣かせたこと……まだ許してないからね」

「二人ともボロボロのオボロボロにする」

エルルウさん、ウルトリイさん、トウカさん、カミュ、アルルウたちにも見つかった！ 完全に、ハクオロと一緒に自分も標的にしているッ！

「くっ！」

「こうなったらー！」

「ハクオロ防壁ー！」

「ハク防壁ッ！」

「……………」

何とか逃げようとハクオロを前に放り出して、その隙に逃げようとしたが、ハクオロも自分と同じことを考えていたようで、二人で同じ体勢のまま固まってしまった。

「……………」ハクよ……………私は娘をこれ以上泣かせたくはない。君は、私と違って融通が利く。帰りたいまえ。私は二人に全てを託し、後は隠居しよう……………」

「いやいや、今までサボっていた分、ここで挽回しないでどうする。自分が帰れない間は、あんたがしつかりとしないと……」

互いが互いに譲り合うような形で一步も引かない自分とハクオロ。  
すると、そんな時だった！

「ねえねえ、ウルウ姉ちゃん、サラア姉ちゃん、このおじさん誰？ それにく、あそこにも綺麗なお姉さんたちがいっぱい居るけど、おら、もうどうしていいか分からないぞ」  
たくさんの美人な女たちを目にしたことで、しんのすけが嬉しそうに興奮気味にクネクネした。

だが、そのしんのすけの言葉に対して……

「しんのすけ。アレらは『お姉さん』ではない」

「見かけは非常に若作りをされていますが、実年齢は既に『熟女』の域に達していると思われます」

「ババア」

「ちなみに、一人の殿方に複数の女性が群がることを、神代言語で『はーれむ』と呼びま  
す」

「ババアハーレム」

「でも、主様ご安心を。私たちはまだまだ主様好みの実を咲かせることが出来ますので」

その言葉は、自分もハクオロも言葉を失い……

「えっ……お、おばさん？　ち、ちなみに、おらのかーちゃん、29歳だけど、あの人たち……」

「全然年上」

「痛々しいぐらいです」

……ブチッ！

「……あ？」「……」

世界が闇に包まれ、暗黒の雷が鳴り響いているかのような錯覚に陥った。

殺される！　そう思った瞬間、走ろうとした自分の袖をハクオロは引つ張った。

「私を置いていかないでくれ！」

「知るか！」

「クオンに言うぞ！　私は君ほど自由な身ではなかったとはいえ、君の先代だ！　君の

能力をクオンに詳細に教えるぞ？」

「ぐぬっ！　……」

「とにかく、今は逃げるぞ。私もせつかく復活したのに死にたくはない」

「ならば、対価は？」

「……十数年前、私がこっそり隠しておいた秘蔵の酒。誰にも見つからずにひそか

に保存されていたこともあり、今が最高の飲み頃だ」

「契約成立だ！」

眼前に迫る、恋に狂った美しき禍日神たち。

どこまでも追いかけてくる彼女たちからは、恐怖しか感じなかった。

「」「絶対には、逃がさない！」「」

こうして、自分、ハクオロ、しんのすけ、ウルウル、サラアナの五人の逃亡が始まった

自分たちの旅はこれからだ！

## 第4話 コーモン様のお通りだぞ

「ハクく、オウロくさくさん！ ハクさくさん！ 二人とも待ちなさいーいッ！」

なんか、エルルウさんからフォークが飛んでくるんだけど！ なんでフォーク？ この国にはフォークがあるのか？

「まずいですわね。まさか、かつて戦乱の世にて名を馳せた策士二人が手を組むなど……主様ア、もうお戯れでは過ぎませんことよッ！」

カルラさんがその場で拳を繰り出すだけで拳圧が飛んでくるんだけど！ あの人の、仮面の者じゃないよな？

「大封印を発動されたくなければ、降伏をオススメします！」

あんた、そういうキャラだったんですか、ウルトリイさん！ 一番常識人だと思つていたのに！

「くけーっ！ 聖上く！ ハク殿く！ 某とクオンの未来のため、神妙にして頂く！」  
なんだろう。トウカさんだけ平常運転に見えるのは。

「逃げてもいいよ。その代わり、カミユたちも手加減なんてしないんだから！」

お前ら、楽しんでるだけだろ、カミユ！

「かくごする」

アルルウ、ムツクルには一応手加減するように伝えてるよな？ シヤレにやらんぞ！

とまあ、乙女の怒りなんて可愛い言葉では済まされないほどの攻撃が背後から次々と飛んでくる。

「ハクオロ、なんかいい能力はないのか？」

「私は普通の人間だ！」

「策は？」

「やはり……君を囮に……」

「……見捨てるぞ？」

「い、いや、待ちたまえ！ というか、君も考えたまえ！ ヤマトの総大将にまでなった

漢だろう！」

「自分はオシユトルの名前があつたから出来ただけだ。ただの辺境の男から大陸の皇にまでなったあんたと一緒にするな！」

自分もハクオロも寸前のところで回避しているが、このままでは時間の問題だ。

何か良い策はないものか？

そう思ったとき……

「ねえ、ハクとーちゃん、おじさん、何で逃げてるんだ？ 何か悪いことしたのか？ おら、もう疲れちゃったぞ」

段々バテてきたしんのすけの素朴な疑問にハツとなる。

何か悪いことをしたのか？

「悪いことをしたんだつたら、逃げないでゴメンなさいをするんだぞ？ 幼稚園ではみんなやってるんだぞ？」

「しんのすけ……」

「女の子に悪いことをしたのに知らん顔するやつは、ゲスの極みなんだぞ？」

いや、自分たちは悪いことをしていないぞ？

ハクオロは不条理な要求に潰されそうになり、自分は神様だから人間と気軽に会うわけにはいかない……そう、ちゃんと理由が……

そう、その理由は全て、男の身勝手な理由。

その身勝手な意地が、こうして女を悲しませている。

そう気づいた瞬間、ハクオロは足を止めた。

「……みんな、聞いてくれ」

ハクオロがピタッと足を止めて、その場で語り出した。

その後姿を見て、先ほどまで鬼気としてハクオロに迫っていた女性陣も、その只なら



ぬ気配を察して足を止めた。

「エルルウ。私は……どんな顔をして皆と接すればいいのかを、未だに戸惑っている。ましてや自分はエルルウから多くの時間を奪ってしまった。そんな自分にエルルウは変わらずに接してくれることに嬉しく思う反面、どうしても気を使わせているのではないかと思う……いたたまれなくなっていました」

「そ、そんな、ハクオロさん……私は好きでやっているんです！ だから、今、本当に幸せなんです」

「カルラ。お前は何年経っても自由で、それで居て——」

とまあ、そこから暫くハクオロの独白と女性陣との甘酸っぱいやり取りがあり……

「——そう、だからこそ……そんな皆の想いを十数年ぶりに感じたことで、色々と考えてしまい、少し一人になりたかったのかもしれない。すまなかった」

「「「ハクオロさん（主様）（ハクオロ様）（聖上）（おじさま）（おとーさん）」」」

このジゴロめっ！ 女性陣は、ハクオロの一人一人への言葉に大変満足したのか、頬

を赤らめて、先ほどの瘴気が浄化されていた。

「私たちこそ、ハクオロさんのお身体の負担等を考えずに……本当にごめんなさい。葉師失格です……」

「たとえ何年経とうと、来世になろうとも、私が主様のモノであることに変わりありませんわ」

「ただの女になるのは本当に久しぶりで、ハクオロ様との再会の喜びで私もとんだ粗相を……本当に申し訳ありません」

「聖上、この不忠なる某をお許しください」

「本当にごめんね、おじさま。でも、これからは、おじ様をもっと支えるよ」  
「おとーさんの気持ちも考える」

しかし、この人たちもこういう顔をするんだな。

今まではクオンの保護者という立場で、すべてにおいてクオンを優先していた人たちが、こんなに自分に素直になって、ただの女として愛する男に想いをぶつける。

こんな光景を見ただけでも、ハクオロをこの人たちの下へと帰すことができている良かったな。

「主様。私たちがいる」

「二人で五人分、十人分の働きをします」

そんなハクオ口とエルルウさんたちが羨ましかったのか、この二人も自分にしな垂れかかってきた。

と、さてさて一件落着ということで、そろそろ自分も……

「ほうほう、おじさんはなかなかのプレイボーイですな。で、おじさんはこの人たちの中で誰が一番好きなんだ？」

「……へっ?」

「[[[[ツー!]]]]」

と、その時、しんのすけが爆弾を放り込んだ。

誰が一番好きなんだ……いや……別にそこまでは女性陣も聞く気はない。

彼女たちは互いに互いを認め合っているからこそ成り立っている関係性。

誰も分け隔てなく平等に……それがハクオ口なのだが……でも……ねえ、やっぱり女性たちもそれはそれで気にならないかといえば……

「は、ははは、何を言っているんだい、坊や。誰が一番だなんてそんなことはない。私た

ちは家族なのだから」

少々顔を引きつらせたハクオロがそう言った。

しかし次の瞬間、しんのすけは「やれやれ」と両肩を挙げて溜息を吐いた。

「やれやれだぞ、おじさん。家族っていうのを、一番便利で都合のいい言い訳に使っちゃダメだぞ。女心はアクション仮面の怪人みたいに恐いんだから、誰にでもいい顔ばっかしてると、いつか刺されちゃうぞ?」

お前は本当に五歳児なのか! でも、言わんとしていることは分からなくもないが、今、そんなことを言ったら!

すると、女性陣はニツコリと微笑みながら……

「大丈夫です、分かっていますからハクオロさん。十数年前……あのままハクオロさんが居たのなら、私がトウスクルの皇后でしたから……」

「分かっていますわ、主様。私が本妻になっていたことなど」

「ハクオロ。私があなたの奥様になっていたであろうことは、ちゃんと理解しております」

「そそそそ、某は……にに、に、新妻に……」

「カミュは幼な妻になってたよね?」

「アルルウは、かーさんになつてた」

顔はニツコリだけどお互いに牽制するようなことを言い合つて……こ、恐い、恐いよ。もう、自分はいまのうちに……

「そ、そう！ そんな私の所為で、君たちをずつと未亡人にしてしまった！ だからこそ、今、我らがすべきことは一つ！ 我々の大切な娘であるクオンにも同じようなことをさせてはならないということ！ だからこそ、今、ここに居るハクを捕まえることこそが我らの天命ッ！」

……えつ？

「えつ、ちよつ、お、おいしい！ ハクオロツ！ お、お前、自分を裏切つたのか！」  
「すまない、ハク。父とは、娘のためなら禍日神になろうと地獄に落ちようと悔いはない！」

ハクオロのやつ、自分を裏切つただけでなく、標的に！ くそお、恩を仇で返しやがて！

「……そくですぬ、ではやっぱり、無理してでも私たちに遅れを取り戻してもらいますからね」

「ならば、やはり二人まとめてトウスクールに連れ帰り、早々に華燭の典といきますわ」

「クオンの妹か弟を私たちが、そしてハク様、あなたが私たちに孫を……」

「そうと決まれば話が早い」

「覚悟しなよ。クーちゃんと私たちの家族計画」

「いっばい産む」

でも、やっぱりハクオ口もただではすまないっばいな！ 二人まとめてこの人たちは狩る気だ！

……っていうか、そもそもベナウイだったり、この人たちだったりといい、何で自分が将来的にトウスクールに行くことが確定しているんだ？

「あいや、待たれい！ 控えろーっ！」

その時、禍日神と再び化して自分たちに飛びかかろうとするトウスクール勢に待ったをかける声上がる。



る。

「皇女さん……いや、……今は、帝さんか……」

自分が思わず眩くと、傍らのムネチカが再び声を上げた。

「控えろー！ この紋所が目に入らぬか！ ここにおわすお方をどなたと心得る！」

懐から取り出した印籠を掲げるムネチカ。

ああ、知ってるよ。そこに居るのが誰なのか。

ヤマト総大将オシユトルが崇める、ヤマトの帝、アンジユ様。

「うっほほーい、ケツだけ星人でござる〜！ てーやんでてーやんでー！ おらのコー

モン、見てコーモン！ ブリブリブリ〜！」

「「「ぶばはあああああああああつ！」「」」」

その瞬間、しんのすけのケツだけ星人が炸裂し、自分もハクオロもトウスクル勢も、当然ムネチカも帝さんも盛大にズッコケた。



## 第5話 ハクとーちゃんはゲスの極みだぞ

思わず五歳児の子供にゲンコツしてしまった。

トウスクール及びヤマトの重鎮と皇族を前にケツ出して「ぶりぶりぶり〜」とやらかしたしんのすけに、自然と「ポカツ」と振り下ろしてしまった。

「んも〜、ハクとーちゃん、痛いぞ〜」

「お前が悪いッ!」

「やれやれ、女の子を泣かすだけでなくDVまでしちゃいますとは、ますますゲスの極みを越えるゲスの神ですな〜」

「ふぐつ! た、確かに自分は神ではあるが……と、とにかく、しんのすけは少し黙ってなさい。大体、皇女さんの前でよりもよってケツ出す奴があるか!」

「んも〜、それはおらのちよつとした、で・き・〜・こ・ろ」

自分がかつての時代でも、そしてこの時代でも子供なんていなかったが、子供が居たらこんな感じなのだろうか? とにかく、こんな手のかかる子供を育てている、自分と声が似ているという野原ひろしという男に、同情と尊敬を抱いてしまう。

「えー、この無礼者！ よ、よ、余の前に、で、で、臀部を晒すとは何事じゃ！ それに、ハクよ！ とーちゃんとはどういうことじゃ！ そ、そなたに隠し子が居たなど、余は聞いておらぬぞ！」

「ハク殿！ よもや、我らの前から消え、その後も姿を現さなかつたのは、ソレが原因だつたと申すのではないだろうな！」

しんのすけのケツだけ星人でズッコケた、皇女さんとムネチカが怒りに染まつた表情で立ち上がった。

「い、いや、待つてくれ、……いや、お待ち下され、聖上！ 某は決してやましいことなどとはしておりませぬ」

「そーそー、ハクとーちゃんは、ウルウ姉ちゃんとサラア姉ちゃんとか、やましいことはしないんだぞ？」

「よくいった、しんのすけ」

「そう、やましく甘美で淫猥な日々を私たちと過ごしていたが故に、主様は……」

「ハク……やはり……君は、この場でクオンのために捕らえた方がよいのかもしれないな……」

余計なことを言うな、しんのすけ！ それに、ウルウルもサラアナも乗つかるな！

ハクオロまで完全に裏切るし！

「ほう……余をほったらかしにして……随分とふざけたことを……のう？　ハクよ」  
そして、こんな風に足止めされていたからこそ……

「ようやく追いついたぞ、貴様らア！　ツ……これは聖上……」

「遅くなりました……おや？　これは聖上……皆さんもおそろいで」

「総大将？　なくしてんですか？　まさか、また抜け出そうとしたんですか？」

ミカヅチ、ベナウイ、クロウまで追いついてしまった……

「ミカヅチよ、良いところに来たのじゃ。これより、ハクを捕らえる」

「御意に」

ミカヅチはすぐさま、皇女さんへと膝をつき頭を下げる。

頭を下げたミカヅチ、そして傍らのムネチカに対し、皇女さんは……

「しかしじゃ、余の半身でありながらもその役目を放棄しただけでなく、隠れてなにやら不忠なる行為をしていたと思われるこやつを、ただ捕らえるだけでは生ぬるい。二度と余の前からいなくならぬよう……」

皇女さんは、目をカッと見開き……

「ミカさん、ムネさん、懲らしめてやりなさい」

「御意！」

ちよ、ちよつと待て！ いや、冷静にやめてくれ！ 機動力、守備力、馬鹿げた火力の攻撃力、その三位一体でこられたら、正直、自分の力が術によつて押さえつけられてなくても、勝てる自信なんて全くないぞ！

「さあ、もう逃がさぬぞ、ハク！ ヤマトへ連れ帰り、もう二度と余は手放さぬからな！ 戻つたら、祝言じゃ！ かーつかつかつか！」

皇女さんが高笑いと共に、あの巨大な大剣を振り回す。

だが……

「お待ち下さい、ヤマトの帝様」

「ええ、聞き捨てなりませんわね」

「その御方は既に我らの娘との将来が決まっております。我らオンカミヤムカイもそれを望んでおります」

「うむ、ハク殿は、クオンと結ばれ、我らトウスクルの繁栄をもたらすのだ」

「ハクちゃんは、クーちゃんのお婿さんになるから、ヤマトじゃなくて、トウスクールにこれからはずっと居るんだよ？」

「ハクはうちのこ」

「ええ。ですので、連れ帰るのはトウスクールです」

「そういうことですね、ヤマトの皆さん？」

あ、あるええ？　なんか、問題があらぬ方向に……

「むむ？　無礼者！　いかに、和平を結んだトウスクールとはいえ、余の半身たるハクをく  
れてやるわけがないであろう！　控えろ、田舎者共！　ハクは誰にもやらん！　ハクは  
ずっと余のものなのじゃ！」

「彼は我等ヤマト総大将。その魂も未来永劫、我らと共に！」

「そういうことだ。控えろ、トウスクールたちよ。それとも、和平を破棄して、今、我らと  
一戦交えるか？」

こ、これは、ほ、本当に戦争が起こる？　自分の所有を巡って？　いや、そもそも自  
分はそのどちらにも行くつもりはなく、タタリ浄化の旅が……

「ちよ、ちよっと待ってくれ！　自分は、そのどちらにも……そう、自分は……某は今、

果て無き旅の途中に居ます。永劫の苦しみの中に居る全ての同胞に安らかなる救いをもたらす日まで、某の旅は終わりませぬ。聖上、そしてトウスクルの方々。皆のお気持ちは心より嬉しく思います。しかし、某は果たさねばならぬ役目がありますゆえ、どちらにも行くわけには……」

「ッ、……ハク……」

マジメで真剣な重い口調で語る自分に、一触即発だったヤマトとトウスクルの戦争は何とか静まり……

「そっか、ハクとーちゃんは、どっちにも行かないで、ウルウねーちゃんとサラアねーちゃんとしっぽりする方を選ぶんだな？」

「そう、某はしっぽり……な、……なにいいいいいつ？」

「そーかそーか、ハクとーちゃんは、尽くす女の子を選ぶんだな。おら、そういうのいいと思うぞ?」

「いやいやいやいや、待て待てしんのすけ！ お、お前は何を！」

「主様、デレた」

「しっぽりどころか、ねっとりずっぽりとこれからもお相手します」

そう、ヤマトとトウスクルの戦争は回避され、その火種は……

「おつ、そ、そうだ、自分はピアノのお稽古に行く時間だ……そ、それでは」

「……ハク——ツ！……」

こつちに飛び火した！……だけでなく！

「そーなん？ おにーさんは、尽くしてくれる女の子が好きなん？ せやったら、うち、これからいっくつぱい、おにーさんに尽くすえ」

「うむうむ！ 良人を支えてこそ、いい女なのだ！ そして、私はあの日よりもつといい女になっているぞ！ ……つて、わ、私はそ、そういう意味で言ったわけではないぞ！ た、ただな、その、お、お前の子種的なものを少々戴きたいというのはあるが、その……」

「もう、引き下がりません！ どこまでだって、私はハク様に尽くします！ ハク様の旅が永劫続くというのなら、私も永劫尽くします！ ダメだと言われたって、ついて行きます！」

燃え上がった火に、油がさらに注ぎこまれたツ！

いや、もはや、油だけでなく火薬も放り込まれて……

「あ、……アトウイ……ノスリ……ルルティエ……」

変わらぬ微笑み、変わらぬ照れた様子、そして再会の喜びと己の意思を力強く示す表情。

「やつと……やつと見つけたえ……おにーさん」

「ああ、やつと我らも追いついたぞ……ハク」

「つく、ハク……さま……ハク様なのですね？」

ああ、三人まで……

「……ハク……クオンの父として複雑だが……君には同情せざるをえない」

完全に哀れんでいらっしやるハクオロ！ しかも、さつきまでの女性陣の矛先がウヤムヤになってホツとしたのか、完全に気配を消して静観している。

「えっ……は、ハクとーちゃん？ ど、どーいうことだ？ ま、また増えたのか？ おじ

さんなみにプレイボーイ？ 週刊文夏が居たら、ハクとーちゃん取り上げられまくるぞ

？ ハクとーちゃん、誰が本命なんだ？」

「しんのすけ、愚問」



「私たちに決まっています」

そしてこっちも爆発物を容赦なく次々と投下するし……

そしてこんな状況の中……

「何を言っているのかな？　ハクは……わたくしが本命……そして、わたくしのものに

決まっているかなッ！」

「兄様は……ひつぐ、あゝにさま……」

最後の爆弾が放り込まれた。

## 第6話 年貢の納め時だぞ

ああ、ついに見つかつちまつたか。

自分を探して大陸を奔放するお前を時折見かけ、影からこつそりと様子を伺ったりもしていたが、こうしてお前と会うと……

「さて、自分は学習塾の時間故……さらばっ！」

怖いからやっぱり逃げよう！

……と、立ち去ろうとした瞬間、足元に数多の苦無が突き刺さった。

そして次の瞬間には、炎の壁が自分の行く手を阻んでいた。

「もう逃がさないって、言つたかな！」

「私を甘く見るななのです！」

二人は既に自分の前へと回り込んでいた。

まるで、自分のやろうとしていることなどお見通しだと言わんばかりに。

「ぐっ、クオン、ネコネツ！」

逃がさない。そんな意思を涙で潤んだ瞳と共に自分に向けてくる二人。

思わず怯んだ瞬間、クオンの尻尾が伸び、力強く自分の首を掴んで締め付けた。あつ、

でも、なんだか懐かしい……

「ご、はっ！」

「ハクとーちゃん！　へんたいへんたい、ハクとーちゃんがへんたいだー！」

そ、それを言うなら……たいへんだ……だ、しんのすけ……

「どこへ行く……」

締め付けられた首が千切れそうなほどの痛みが襲い掛かり、声すらも出ない。

そして、自分の首を締め付けるクオンの姿に、誰もが言葉を失って、ただ黙っていた。

そんな中、クオンからいつもとは違う声が発せられた。

「ハク………汝は………我を置き………どこへ行く………」

く………クオン………

さ、更に首絞めだけじゃなく、空いている拳で腹を、ごごっ！

「我が選んだ漢が………我が惚れた漢が………我の傍ら以外の場所で………何をしておるかア

！」

「ごごっ！　ぐぼっ、が、はっが、ごっ、ふごっ！」

ぎ、ギブギブギブギブ！

「ひ、ひいい、は、ハクとーちゃんがー！　このおねーさん、ネネちゃんみたいだぞーッ

！」

……しんのすけ、お前の友達に、こんな怖い子が居るのか……

「ぐっ、くお……ん……しゃ、しゃれに……ならん……」

「先に洒落では済まないことを我らにした汝が、それをヌカすかアツ！」

内臓が潰される衝撃。

「何が伝えるべきことは伝えただ！」

「ぐはっ！」

「何が私の気持ちはもう伝わっているだ！」

「がはっ！」

「我があの時、どれだけ待てと言った……」

「ぐっ、がっ」

「何が楽しかっただ！ 何があるがとうだ！ 言いたいことを自分だけは言っただけ満足し

たように……我の前から消え……」

「ツ、ぐっ、クオン……じぶん……は……」

「……伝えきれなかった……伝えたかった想いが……どれだけ……あつたと……思っ

……いるのかな？」

頭蓋骨が破裂したかのような衝撃。

後頭部から地面に叩きつけられ、神になって以来初めて感じる痛みに思わず呻き声を

上げてしまった。

「ぐっ、がは、…………ツ…………クオン…………」

容赦ないクオンの攻撃に、自分はただされるがままだった。

だが、苦痛と共に開けた瞳に写った光景。自分が見上げたクオン、そしてネコネの表情は……

「でも…………でもツ、ようやく…………ようやく追いついたかな…………ハクツ！　ようやく捕まえたかな、ハクツ！」

「あにさま…………ひっぐ、どうして…………どうして帰ってきてくれなかったですか…………ずっと、待っていたのです…………」

その瞳から零れる大粒の涙を前にして、爆発寸前だった場の空気が一瞬で静まり返った。

クオンとネコネ。二人が見せる大粒の涙は、神になった自分の心を深く抉った。  
でも……

「クオン…………言っただけ…………ハクは死んだ…………」

「えっ…………？」

「ハクは死んだ。オシユトルであった某も死んだ。そして…………人間だった自分も死んだ…………もう、自分は…………」

自分はもう、皆とは完全に異なる存在になってしまった。

だから……

「そんなことない！　ハクだよ！　ハクなんだから！　どうして……、神様になったって変わらない……ハクは、わたくしたちのハクなんだから！」

「そうなのです！　兄様は、私の兄様なのです！　たとえ何があっても、兄様はこれからもずっと、大好きな兄様なのです！」

そんな自分の言葉を遮るように、クオンとネコネが叫んだ。

「兄様……見てくださいなのです……私、殿学士になったのです……ずっと、兄様に褒めてもらいたくて、エンナカムイで……兄様の故郷で、兄様の帰る場所で、兄様の帰りを待っていたのです！　……それなのに……」

ああ、知っている。心の中で褒めていたさ。心の中で、何度もその頭を撫でてやっていたさ。

でも自分は……

「すまない……クオン……ネコネ……みんなも……でも、自分はもう……」

揺らぎそうになる心を押し殺す。忘れるな、自分の成すべきことを。自分の存在を。

ヤマトも、トウスクルも、かつての仲間たち。ここから信頼できる戦友たち。家族。

人間だったところに紡いだその絆がどれほど愛しく思っても、自分は……

「ずるいぞーっ！」

「——ッ！」

そんな心の中の自分の葛藤を完全否定するかのような声が響いた。

思わず、肩が大きく震えた。

誰もがその声に目を見開き、その声を発した人物へと視線を集める。

それを言ったのは、しんのすけ。

自分の心の葛藤を、「ずるい」と……

「なんで、ハクとーちゃんもおじさんもこんなにモテモテなんだ！ ずるいぞずるいぞーっ！」

……と、なんかズレたことを言って、不満そうに地面をゴロゴロ寝転んでいるしんのすけ。

だがしかし、しんのすけはそんなつもりで言ったわけではないもの、しんのすけの「ずるい」という言葉が、どうしても胸を貫いた。

そして、地面をひたすら転がりまくったしんのすけは、急に立ち上がり、自分の元へと駆け寄って来た。

「でも、ハクとーちゃん。モテモテでも女の子を泣かしてばっかだったら、いつか愛想をつかされちゃうぞぞ？」

「しんのすけ……自分は……」

愛想をつかされるか……いや、その方がいいのかもしれない。自分のことなど忘れて……

「男の子は女の子を泣かせたらダメなんだぞ！ お兄ちゃんは妹を泣かせたらダメなんだぞぞ！」

「ッー！」

違うんだ……泣かせたかったわけじゃ……

「まだ……子供のしんのすけには難しいかな？ でもな、どうしようもないんだ……こればっかかりは……」

「……ハクとーちゃん……」

切なくなつた気持ちを誤魔化すように笑いながら、しんのすけの頭を撫でた。

「理由があるんだ。もう、自分は……みんなと一緒にいることはできないんだ……」

それは、しんのすけだけにではない。クオンやネコネ、皆に向けて言った言葉だ。



もう自分はみんなと一緒にいることはできないのだと、改めて……

「理由があるのか？　なら、理由がなければお姉さんたちにも好きっていうし、一緒にいるのか？」

「……………えっ？　あ、いや……………えっと、その……………」

理由がなければ……………？　もし、自分がただの人間のままだったら……………そんなの……………当然……………

何の含みもなく純粹に聞いてくるしんのすけの言葉に、思わず言葉が詰まった。

「し、しかし、だな、……………自分には果たすべき役目がある……………だから……………」

「おっ？　だったらお手伝いしてもらえばいいんだぞ。おらのとーちゃんは、家族がないと何もできないんだぞ？　ハクとーちゃんは違うの？」

違わない。自分は一人ではなかった。皆が居たからこそまでこれた。

皆が居たからこそ乗り越えられた。

でも……………

「おっ、よくやく見つけたじゃない！」

「おっ、ハク、いたぞ〜」

「兄上ッ！　やっぱり、兄上！」

「やれやれ、探しましたよ。全く、あなたという人はどれだけ僕たちを困らせればよいの

ですか?」

「ああ、ようやく見つけました! クーちゃん、良かったね!」

その時、同じく自分を探していたヤクトワルト、シノノン、キウル、オウギ、フミルイルまでもが駆けつけてきた。

みな、同じように自分の姿を見ては、喜びの笑みを浮かべてくれる。

そう、皆の気持ちをこれだけ痛いほどに知っていながら、自分は……でも……

「しんのすけ……自分は……」

「おっ?」

どうしてこのとき、自分はしんのすけに聞こうとしたのか分からなかった。

「自分も……みんなのことが大好きだ! でも、自分は一緒に居ることができない。自分はやらなければならぬことがある! そして何よりも、もう自分はみんなとは違うんだ! 普通じゃないんだ! そんな自分が、どうして皆と一緒に居ることが出来る!」  
神となった自分が、五歳児に相談と悩みを打ち明ける等考えられないこと。

でも、無神経に、純粹に、それでいて何故か物事の本質を突いてくるかのようなしんのすけに、気づけば自分は尋ねていた。

するとしんのすけは、自分の問いかけに対して、実にキョトンとした顔をしながら

……

「なんで？ 好き同士ならそれでいいんだぞ」

当たり前のように自分に向けて言った。

貫くところではない。胸の中にあつた、よくわからん意地みたいなものを、粉々に打ち砕いた。

たとえ、自分がもう「普通」とは違う存在であつても、自分が皆を好きで、そして皆が自分を慕ってくれるのであれば……

「ハクとーちゃん、ちよつとしつれい」

「ん？ お、おい、しんのすけ」

「くんくん、うっ、足くっさいぞ〜〜」

さらに、しんのすけはそのまま屈んで自分の足に顔を寄せてきた。

クンクンと匂いを嗅ぎ、すぐに気持ち悪そうな顔を浮かべた。

「っておい、なぜ今？」

しかし、しんのすけは、自分の足の匂いに文句言いながらも……

「ハクとーちゃん、確かに普通じゃないぞ。足、すっごく臭いぞ。でも、足が臭いのはおらのとーちゃんと同じだぞ」

「なにい？」

「おらのとーちゃん、足は臭いし家族がいないと何もできないダメダメだけど、おらのとーちゃん、家族がいるから頑張れるって言ってたぞ。家族はいつも一緒なんだぞ？」  
「ッ！」

なんて、そんな当たり前のことを……自分はずつと……意地になって……そんな、五歳の子供にだつて分かることを自分は……

「そつか……普通じゃないか……でも、そんなのお前のとーちゃんと同じで……家族は一緒じゃないと……」

「おっ?」

「くく……はははは……本当に……そうなんだよな……」

自分の家族。血の繋がった本当の家族は……もう居ない……兄貴は、もう居ない。でも、みんなは居る。

「クオン……ネコネ……みんな……」

「……ツ、ハクツ……」

顔を上げ、気づいたら自分は皆に問うていた。

「お前たちは……こんな自分でもいいのか?」

その一言に、クオンたちは勢いよく顔を上げた。

「こんなじゃない！　ハクじゃないとダメなの！　そんなハクがわたくしたちはいいの  
！」

「いいに決まっています！　当たり前なのです！　兄様じゃないと嫌なのです！」  
「ハクはハクだよ！　何も変わらない。めんどくさがりで、怠け者で、すぐに横着しよう  
として……だけど……だけど、重いものをいつも一人で背負おうとして……それを、分  
けてよ……ハク……わたくしも、一緒に背負うから！」

「だからもう、置いていかないでほしいのです……ずっと一緒に居て欲しいのです……  
あにさまが……いてくれたら……わたしはもっと笑うことができますから……」

クオンとネコネの叫び。その二人につられるかのように、他の皆も一斉に声を上げ  
た。

「んもく、おにくさんって意外に頭悪いえく、そんなん、いいに決まっとるやん」  
「私も、そんなハク様だからずっとお慕いしているんです！」

「その通りだぞ。ハクともあろう良い男が、そんなことも分からなかったのか？」  
「そんな分かりきった愚問を、今更、余に聞くではない！」

「まったく、小生らを侮り過ぎだ」

「くくくくく、皆はそう言っているぞ？ 我が友よ」

「はい、そんな兄上に僕たちはこれまでも、そしてこれからもついて行きます！」

「だ、そうですよ？ ハクさん」

「当たり前じゃない。旦那だからついていくじゃない」

「おー、ついてくぞー！」

「ええ。クーちゃんが好きになった人に、私たちもついていきます！」

愚問。これほど答えの分かりきった愚問に対する答えを皆はハッキリと答えてくれた。  
た。

ならば、自分は！

「この旅は終わりが見えぬ果て無き旅。幾多の苦難や試練があるやもしれぬ。だから皆……力を貸してくれないか？」

その瞬間、「応」と答えるまでもなく、皆が一斉に自分に飛びついてきた。

「当たり前かな！ もう、絶対に離れないし離さないし、逃がさないかな！」

「そうなのです！ これ以上、泣かせたら怒るのです！」

「ほな、道中、あゝんなことや、こゝんなことも、いっばいするえ」

「うむうむ、いくらでも手を貸すぞ！ 仲間のためならいくらでも命すらも預ける。それがいい女というものだ！」

「また、そしてこれからも一緒です！」

「うむうむ、これにて一件落着なのじゃ！ かーつかつかつか！」

「やれやれ、また聖上自ら……なれば小生も同行させて戴きます」

「くくくく、また騒がしい日々になるな」

「今度こそ、兄上を守って見せます」

「ですが、ヤマトも聖上不在では問題ですね、ならば、僕はいつも通り、ヤクトワルトさんとシノノンと……」

「任せるじゃない。最近、シノノンもすっかり影武者に慣れてきたじゃない」

「おー、まかせろ。シノノンは、うまくえんじてやるぞ」

「また、楽しくなりますね。よかつたね、クーちゃん」

「好き同士ならそれでいい……こんな簡単なことでよかつたのか……」

「自分は普通じゃない。でも、そんな自分でもいいと言ってくれるなら……」

「そんな自分たちの様子に、トウスクル勢は優しく微笑んでいた。」

「よかつたわね、クオン。そして、もう離してはダメよ？」

「ええ、もう逃がさないように、首輪でもつけておきなさいな」

「私たちの娘を宜しく御願います」

「あなたに言うのも変ですが、息災で。そしてクオンのことをどうか……」

「ねえねえ、アルちゃん、私たちも今度はついていっちゃおうか？」

「いく」

「安心しましたよ、ハク。我等が女皇をよろしく御願います」

「もう、お嬢を泣かせたら許さねえからよ」

そして……

「君の口からそのような言葉が出て、本当に嬉しく思うよ」

そんな自分にハクオ口も微笑みを見せた。

「クオン……」

「父様……」

「彼と共に、広い世界を見てきなさい。例えばここに居ても、私も、お前のたくさんの母や兄や姉たちも……そして、ユズハも……お前の幸せを祈っている」

旅立とうとする娘であるクオンを抱きしめ、そしてハクオ口は再び自分を見て……

「娘を……頼む」

まかせろ。自分はそう頷いた。



でも……これだけで終わったら少しつまらない。  
というか、ハクオロは自分を裏切ったりしてきたし、ここはささやかな復讐……

「そーだな！ まかせろ、ハクオロ！ そっちも、クオンが不在で滞るトウスクルの政務とかは任せたぞ！」

「……むっ……」

ハクオロの笑顔が固まった。そしてハクオロが何かを言う前に、後ろではベナウイが「当然です」と頷いている。

さらに……

「まあ、トウスクールも皇女不在で何かと不安かもしれないけど、大丈夫だよな？ だつて、これからはハクオロが頑張つて、クオンの妹や弟をたくさん作るんだからな。なあ？ エルルウさん？ 皆さん？」

「……当然（ニツコリ）」

「……えっ……な、え、いや、ちよ、ですな……あ、あれえ？」

顔をサーツと青ざめさせるハクオロに「ぞまみろ」と心の中で呟いて、自分は最後にしんのすけの頭に手を置いた。

「しんのすけ」

「おっ?」

「ありがとな」

あの日以来、自分は心の底からまた笑った。

これで全てが丸く収まった……

……かに見えた。

## 第7話 大人の飲み会はお下品だぞ

「じゃんがじゃんがじゃんがじゃんがー！」

よっ、ほっ、ほいっとな。

真っ裸になって二つのお盆でリズムよく股間を隠す、裸踊り。

大事なところが隠せているか、隠せていないかは些細なこと。

ブラブラとナニか見えても御愛嬌。

「おおおお、ハクとーちゃん、お下品だぞーッ！ オラだつてオラだつてーっ！ ケツだけ星人ぶりぶりぶりーっ！」

「おっ、やるな、しんのすけ！ ようし、こうなつたら自分もだ！ ケツだけ星人ぶりぶりぶりー！」

「なぬっ！ ハクとーちゃんめ、いつの間に！ だが、まだまだ甘いぞーッ！ 秘技・ケツだけ星人ローリングサンダーッ！ からのく四回転半ケツジャンプだぞーっ！」

オケツをプリンと出しても御愛嬌。今日はそんな無礼講。

「だーっはっはっはっは！ 神となった旦那の神の子が、めっさブラブラ見えてるじゃなーいっ！ しんのすけも、やるじゃなーい！」

「くくく、神となつてにしては、まだまだ貧相だな、ハクツ！ 我は鳴神なり！ この肉体美を見よーっ！ これぞ、鳴神ケツだけセージンだーッ！」

「さあ、キウルさん。あなたの成長度合いも見せてもらいますよ」

「ひ、ひいひい、お、オウギさん、や、やめ、あつ、あああああーっ！」

気づけば、ヤマトもトウスクルも関係なく、美味しい酒を飲みながらの宴会になつていた。

「ひいひい、や、やめ、僕は脱ぎませーん！ つていうか、トウスクルの方たちも、それにじよ、女性も、ねねね、ネコネさんも居るのにーっ！」

「おっ？ んも、キウルくんつてばいけずなんだからくん」

「しし、しんのすけくん！」

「よいではないかー、よいではないかー。あむ」

「ひいひい、み、耳たぶをか、かまな、……あぐれえええええええ」

ヤマトの男たちは気付けばほとんどが全裸状態で顔を真っ赤にしながら酒を飲む。

唯一粘っていたキウルも、しんのすけとオウギの挟撃により、服を全て剥ぎ取られた。

「おー、キウルとしんのすけのぷらぷらはおなじぐらいだな」

「……………えっ？」



「こ、こここ、こら、は、ハク、い、いいおとこが、だだ、台無しに、や、やめろおお！」  
「これが小生らを導いたヤマトの総大将か……」

「うむうむ、ルルテイエの本のように、美しき男の友情なのじゃー！」

「まあ、みなさん、とーつても仲がよろしいんですね」

ルルテイエ、アトウイ、ノスリ、ムネチカも、皇女さんも、ファミイルも……

「ほ、ほんとうに、に、賑やか……ですね……私たちの前に現れたのが、ハクオロさんで本当に良かった……」

「まあ、私も嫌いではありませんわ」

「ええ、可愛らしいお尻ではないですか」

「くけえええええ！ クオンの婿となる御仁がなんたることをー！」

「あ、あはははははは、ハクちゃんもああいうところは、おじさまとちよつと違うね」

「クーの好みちよつと変」

エルルウさん、カルラさん、ウルトリイさん、トウカさん、カミュ、アルルウも、なんだかんだといいながら、ちゃんとこの場に居てくれている。

さらに、自分たちを「しらゝ」つとした顔で、我が愛しの妹は……

「私の兄さまが……よりいっそう、お下劣になってしまったのです……」  
と、ネコネが侮蔑の籠った目で見てくる。

つい数時間前まで、ギョツと自分から離れず「これは、甘えているわけではないのです。イジワルな兄様がもうどこにも逃げ出さないように捕まえているだけなのです」と言つてたのに、今はかなり離れた距離で自分を蔑んでいる。

「ははは、でも……わたくしは、何だか嬉しいかな？」

「あねさまあつ！」

「だつて……ようやく……ハクが帰つて来たつて思えるから」

「姉様は甘いのです！　もう、兄様はお下品だったり、ただののんびんだらりとしていい人ではないのです！」

温かい眼差しで瞳を潤ませているクオンに慌てて声を上げるネコネだが、そんなネコネにケツだけ星人のしんのすけが近づいた。ネコネも思わず全身を逆立たせている。

「んもく、ネコちゃんはお兄ちゃんに敵しいぞく、お兄ちゃんは妹の反抗期は寂しくなるものだぞ」

「ふしやあああああああああ！　しんのすけ！　いい加減、お尻をしまうのです！　女性に対してとても失礼なのです！　お尻ばかり人に見せて、何を考えているのです！」

「えく、それはひどいぞネコちゃん。それじゃくまるで、おらが人にオケツを見せるのが

好きみたいに聞こえちゃうぞ」

「「「実際、好きだろうがッ！」「」」」

思わず全員そろって、しんのすけにツッコミ入れていた。

「あはははは、本当に面白い子かな。でも、ハクく、ほんとくに、しんのすけはハクの実の子供じゃないんだよね？」

「そうなのじゃ、ハク！ 余に隠れて、その……他のおなごと……その……ないであろうな！」

「あ、当たり前だ、クオン！ 皇女さん！ じ、自分に、そんな隠し子的なのは居ないぞ」

「そんなー、ハクとーちゃん！ オラとかーちゃんは、遊びだったの？」

「お前も変な冗談を言うな、しんのすけーっ！」

「主様、ひよつとしたら」

「はい、しんのすけは、あの晩に出来た私たちと主様の……」

「ウルウル、サラアナ！ そんな晩は一度もなかったはずだーっ！」

騒いで、笑って、怒られて、メチャクチャになって、つぶれて、そんな日々をどれだけ望んでいたか。

もう二度とこの日々には帰れないと思っていた。



でも、もういいんだ。

お互いが「それでもいい」と思えるのなら、もうこれでいいんだ。

そう思わせてくれたのは……

「それで、オラのかーちゃんとかーちゃんはこんな感じだぞ。御願います結婚してくださいあなたが生きていけませーん、つていつたのはあなたでしょ！ なーに言つてやがる、あなたと結婚できないなら春日部神社で首をつるわーつて言つたのはお前だろ！ まあ、失礼しちゃうわ！ くらえ、主婦の三段腹アターツク！ あーれー！」

ヤマトとトウスクルの重鎮たちの注目を一心に浴びて、笑わせているこの坊主のおかげだ。

「まったく、めちやくちやで手に負えない子供が居たもんだな……こんな子供を預けられちゃ、特別労働手当を要求するね……」

酔いも回り、更に動き回った所為で体もドツと疲れ、気付いたら壁に寄りかかるように座つて一休みに入った。

しんのすけだけは変わらないうちこつちに走り回つては、ヤマトもトウスクールも関係なく注目を浴びている。

「本当に大変かな」

そんな自分の隣に、いつの間にかクオンが居た。

クオンはこの大騒ぎの大宴会の中、自分の隣にそつと寄り添うように静かに座り、自分にしか聞こえないぐらいの声で話しかけてきた。

「ハク……」

「ん？」

「……二人つきりじゃないけど……もう、ハクのこととは……ハクって呼んでいいんだよね？ これからも……」

ほんの少しだけ不安そうに聞いてくるクオン。その言葉で少し前を思い出した。

まだ、自分がオシユトルとして過ごしていた頃、もうハクは死んだのだからハクと呼んではならないとクオンに伝えた時、クオンは「二人だけの時はハクと呼びたい」と言った。

それを自分が了承したときの、クオンの喜びは……

「……好きにしろって……言っただろ……」

「うん！ 好きにする！ 今も、これからも、ずっと好きにするかな！」

思い出したら少し照れてきたので、少しぶつきらぼうに言うが、クオンは途端に花が咲いたような笑顔を浮かべた。

今日、この国に来る前までは、まさかこんなことになるなんて思ってもいなかった。

クオンもそうなんだろう。自分と同じように、笑いの中心に居るしんのすけを温かい眼差しで見ている。

「ねえ、ハク……」

「ん？」

「しんのすけ……結局、どうするの？」

それは、真剣に考えなければならぬこと。

まあ、今この場で話をするのもどうかとも思うが、それでもテキストでは済まされないことではある。

「とりあえず、旅をつづけ、ゲートを探しながらしんのすけが帰る方法を見つけろさ」

全く宛なんてない。明日には、オンカミヤムカイのゲートも試してみないといけない。

しかし、正直、あまり期待はしていない。オンカミヤムカイのゲートも、ヤマトの聖廟への行き来に使っただけで、マスターキーも既がない状態で設定を変えられるとも思えない。

だから、手掛かりは今のところない。

でも、それでもしんのすけはこの世界に来ることができたのだ。だから、帰る方法だっけきつとある。そう思っている。

「まつ、なんとかなるさ。それまでの間……自分が責任もって面倒見るさ」

「それって、ハクがお父様になるってこと？」

「……まあ、あいつがとーちゃんって呼ぶ限りはな」

だから、それまでの間は、しんのすけも自分に懐いてくれていることもあるし……

「ハクもいつのまにか、すっかり保護者かな？」

「ぶっ、はははは、そうだな」

そんな自分に笑いながら言うクオンに、自分もおかしくなつて笑つてしまった。

すると、笑いながらも急に隣のクオンが顔を赤らめてモジモジとしだした。

「あ、あのね、ハク……」

「ん？ どうしたんだ、クオン」

「そ、それならさ、その、ハクがしんのすけのお父様になるのなら、お、お母様も……必要だよね……うん、必要かな！ だ、だから、ハク……わ、わたくしが……そ、そしてらさ、わたくしもハクも……その、うん、保護者とかそういう関係じゃなくて……め、め、めお……と、っていうか、その、ふ、ふー、ふー、ふう……ふ……」

自分もそこまでは鈍感ではない。

こういう状況で「えっ？ なんて？」なんて素で聞いてしまうほど、女心が分からん奴ではない。

それに、クオンの気持ちはずっと前から……そして、自分の気持ちはまた……

「全く、本当に仕方ないのじゃ、しんのすけは。仕方がない、しばらくはハクを父と、そして余のことを母と呼ぶがよい」

「……………は？」

クオンが照れた笑顔のまま硬直した。  
すると、

「は、はううう！ ちよ、あ、アンジュ様く、そ、それは、ず、ずるいです。そうだ、しんのすけくん。わ、私を、お母様って呼んでも大丈夫ですから」

「ルルやんも積極的やなく、せやったら、うちもははさまって呼んでええんよ？」

「な、なにをーっ！ そ、そうだ！ い、いい女とは、母性があるもの！ ゆえに、しんのすけ、私を母上と呼んでもよいのだぞ！」

「うむ、ではしんのすけ、妹も恋しかろう。なれば、小生を妹と認めてくれて構わんぞ！」

「まあ、それではみんなで、しんちゃんのお母様ですね〜」

「いみふ。しんのすけは私たちの子」

「しんのすけは私たちが主様とズツコンパソコンして生まれた子供です」

なんか、皆まで乗った……いや、ムネチカはどうかとも思うけど……

「なくにくをく言ってるのかな？ ハクのお嫁さんはわた……しんのすけの母様の役はわたくしかな？」

「はあ？ 何を言うておる。母が大勢いるのにまともに育たなかった奴が、母役がつとまるわけなからう」

「ん？ アンジユ、言っておくけど、わたくしはもうハクと……ふふふふ」

「な、なんじゃ、その余裕の笑みは！ もうハクと？ なんじゃ、なにをした！」

「え？ 知りたい？ ハクとく、遺跡でね、ふふん」

「な、なんじゃ、思わせぶりに！ どーせなにもしておらんくせに、このヴワアカ！」

「したかな！」

「してない！」

「したかな！」

「してない！」

遺跡で……想いを伝えた……のを思い出して急に恥ずかしくなった！

「しんのすけ、風呂に行くぞ！」

「お、おお？」

「どこ行くかな？」

「逃がさぬのじゃ！」

慌ててしんのすけを脇に抱えてその場から脱出しようとするも、クオンの尻尾で拘束されて、皇女さんにその腕力で押さえつけられてしまった。

そんな自分たちの様子に、また笑いが起こった。

「あらあら、これじゃあ、私たちももう、おばーちゃんね」

「あら、心外ですわ。わたくしはまだまだ子を今からたくさん生むというのに。ねえ？  
主様？」

「マーマになつて、バーバになるのですね。女として少し寂しい気持ちですが、でも、とても幸せそうですね」

「し、しかし、せ、せめて、そ、某もややこを一人生みたいと……」

「じゃあ、ここはおじさまに責任とってもらわないとね」

「おとーさん、こんやねかさない」

と、まあ、こんな感じで宴会が収まることなくどこまでも続いていく……そう思われた。

「ちよ、え、エルルウ？ カルラ、ウルト、トウカ？ いや、あの、ですねえ。こら、カミュ、アルルウ、お前たちまで！ いや、今はクオンとハクの問題こそが我らの……」

「ハクオロオ！ そうやって、自分に問題をすり替えるなッ！」

だが、その時だった！

「帰還したと聞いたときはどれほど驚いたか……しかし、余をほったらかしにして、随分と……楽しそうではないか……のう？ ハクオロよ……」

「ひつぐ、は、ハクオロさま……ひどいですよ……帰還されたというのに、私たちに、全然……全然会いに来てくれないんですから。私、一応、正式な側室なのに……」

——ツ！

「っ!? あ、危ない、みんな！」

誰が叫んだかは分からないが、今、この場を集っているのは一騎当千の猛者たちばかり。

誰かが叫ぶ前に、全員が宴会で緩んだ表情を一瞬で引き締めて、武士の顔してその場を飛びのいた。

「ななな、なんだ？ しんのすけ、大丈夫か？」

「おおお、ハクとーちゃん、なにがおこったんだーっ！ おおおおおおおお、す、すごいぞー！ なんて、あれがあるんだーっ！ おらも乗りたいぞー！」

「大丈夫かな、しんのすけ。ほら、落ち着いて。……それにしても……この声……まさか



……」

突如として、宴会場の屋根が強力な力によって粉々に破壊された。

空は既に真つ暗闇。しかしそこには……

「な、なんだこれは！ あ、アベル……カムル？ いや、なんか形が……」

そこには、拳を突き出して自分たちを見下ろす、巨大な人型の何かが立っていた。

そして、その巨大な何かを、顔を真つ青にさせながら見上げているハクオロは……

「……あつ……ふ、二人のこと……すっかり……わ、忘れてた……」

と、呟いていた。………ヲイ。

そして、目の前に現れた巨大な物体から聞こえてきた声は、ハクオロに告げる。

「余を蔑ろにした罪は、償ってもらうぞ、ハクオロ！ 旧クンネカムンの地下奥深くの禁断の祠に封印されていた、アヴ・カムウを超える力を持つという、このカン・タムウでな！」

………なんか、どこか懐かしい様な………そんな気持ちにさせる巨大な人型の怪物が居

た。

そして、しんのすけは、目を輝かせて大はしやぎしていた。

## 第8話 おじさんは忙しかったぞ

そこには、大自然を思わせる緑一色に覆われた謎の巨大な人型兵機が居た。

アベルカムルではない。大型作業用のもではなく、もつと戦闘に特化した……いや、待て！ アレはどこかで見たことがあるぞ！

記憶……遥か昔の……まだ自分が地下に住んでいた頃……静止画像を取り込んだコマ送りの動画技術……確か、『アニメ』って呼ばれたものを好きだった奴が、保管庫から持ち出したデータを空き時間に見せてくれたが……そうたしか……ダンガ……ガンダム？ いや、違う……確か！ そうだ、思い出した！

「おおおお、カンタムだぞーッ！」

「あれは、超電導カンタムロボではないか！」

「そうだ、アレは、カンタムロボだッ！」

カンタムロボ。遥か昔、かつてまだ地下の世界に大いなる父たちが住む時代よりも遙か昔、地上の世界で娯楽として作られたという、作品。

……えっ？

「おお、おじさんも、ハクとーちゃんもカンタムを知ってるのか、子供ですな〜」

アレをカンタムロボと理解してその名を叫んだのは、自分、そしてしんのすけとハクオロだった。

自分もハクオロも思わず顔を見合わせて言葉を失ってしまった。

「しんのすけ、父様、ハク、アレを知っているの？」

「なんなのです、アレは！ 仮面の者？ それとも、トウスクルの兵器ですか？」

「アヴウ・カムウではなさそうですね……アレは……」

「カンタ……なんとかというの存じませんが、ですがそれどころではなさそうですね、主様」

「聖上、クオン、某の後ろに」

「ふん、しかしどこのだいつかは知らぬが、余に対して何たる無礼！ ミカさん、ムネさん、懲らしめてやりなさい！」

そして、案の定自分たち以外は目の前の巨大な物体の正体を誰も知らないようだ。

まあ、当然だ。自分とて、大昔に知り合いが見せてくれなければ分からなかつたぐら이다。

しかし、何で、しんのすけもハクオロも、アレを知っているんだ？

だが、問題はそれだけではなさそうだ。

「待ってください。それよりも、先ほどの声……ハクオロさん……」

「うむ」

エルルウさんとハクオロがカンタムを見上げながら何かを話している。

そして、ハクオロがどんと顔を青ざめさせている。

一体あの声に何かあるのか？ そう思ったとき、カンタムからまた声が聞こえてきた。

「久しぶりだな……ハクオロよ……余のことを覚えているか？」

「ひつぐ、ハクオロ様……ハクオロ様……」

なんだ？ 皇女さんみたいに、随分と偉そうな喋り方をする女？ そして、もう一人は、泣いているかのような声を発する女。

二人の女がカンタムから聞こえてきたが……

「おい、ハクオロ」

「……………」

「ハクオロオオオオオ！ お、お、お前、まだ他にも居たのか！」

ハクオロの名前を呼ぶ二人の女。その時点で確定だ！

待たせていた女的なものが、ハクオロにはまだ居たのか！ 自分がそう問い詰めると、ハクオロは言葉を失ったまま顔を俯かせている。

やっぱりな。こいつ、どんだけ封印される前に女と関係を……

「く……クーヤお母様………サクヤお母様……その声、そうなんですよ？　ねえ、お母様！」

その時、クオンが叫んだ。

「お、お母様？　クオン、お前、母親がまだ居たのか？」

「う、うん。間違いない。さっきの声は、クーヤお母様とサクヤお母様だよ。ほかのお母様たちと違って、あまり会う機会は無かったけど、間違いないんだから！」

本当にまだ居たのか。ハクオロ、この女の敵ツ！

っていうか、お前、長らく封印されて外に出なかつたのって、こういうゴタゴタが嫌になつたからじゃないだろうな？

「大きくなつたな、クオン。余もお前の成長を母として嬉しく思う。しかし、今はしばらく待て……」

「クオン様、私なんかもお母様って呼んでくださるの、本当にいつも嬉しいですけど……今はちよつと待つててくださいね」

カンタムから聞こえる二人の声。クーヤとサクヤって人みたいだが、聞いたことはいない。

「カンタムロボ……また、随分と物騒なものを持ち出したものだな……既にほとんど思

い出せぬ過去……私が……アイスマンになる前の頃……記憶の片隅にある子供向けの人気アニメ……。アイスマンとして目覚めた頃も……そうだ、ミズシマさんが太古に関するコレクションなどといって、ムツミとミコトと一緒に見せてもらったな……有志で集まった研究者たちで余暇を利用して実物大を作っているという話も聞いたな」

そんなハクオロは、自分にも聞き覚えのある単語をつらつらと並べて、切なそうにカントムを見上げている。

にしても、ミズシマ……ミズシマ……この名前はどこかで……

「だが、今はそれはよい。とにかく……久しいな、クーヤ……サクヤ……お前たちのことを忘れたことなど、片時もない。あの、ゲンジマルが命をとして私に託したお前たち二人を、なぜ忘れることができる」

力強い言葉でカントムに向かって語りかけるハクオロ……ん？

「おい、クオン。ついさつき、ハクオロは二人のことをすっかり忘れてたって……」

「しっ、ハク！ 静かにしているかな！」

慌てて自分の口を尻尾で押さえつけてくるクオン。

「あつ、よく見たらハクオロの後頭部から汗がダラダラと流れている。やっぱ、忘れてたんだな！」

「私が眠りについてからのお前たちのことは、エルルウから聞いていた。クーヤはゆつくりと時間をかけて、壊れた心を修復することができたと。その後、亡国となったクンネカムンに残された民たちをまとめ上げ、彼らをトウスクルの民へとなるよう働きかけてくれていたと。その補佐をサクヤも尽力していたと」

「こいつ、本当に話を聞いていた「だけ」なんだろうな。」

なぜなら、色々なことをこれまで口八丁で誤魔化してきた自分だからこそ分かる。

ハクオロは今、思い出しながら喋っているというところを。

すると、カンタムからは不貞腐れた声が届いてきた。

「で？ 帰還してから、なぜ、余にもサクヤにも一度も会いに来んのだ？」

「そうですね、ハクオロ様の記憶では、アマテラスに焼き尽くされた状態のままの旧クンネカムン。それがどれだけ復興したかをお見せしたかったのに」

そこつつこまれちゃったよ……

まあ、この人が誰で、ハクオロと過去にどういう経緯があったかは知らないけど、一度も会いに来ないのはまずいだろ。……つてか、アマテラスで焼き尽くされたとか、すごい言葉がサラッと出てきてないか？



「よし、しんのすけ、風呂でも入るか」

「待つんだぞ、ハクとーちゃん！ カンタムロボだぞ、カンタムロボ！ おら、カンタムと遊びたいぞー！」

「おお、ハクオロの奴が話終わったら頼んでやるよ」

「ほーほー、んー、おじさんは、カンタムから聞こえるお姉さんとも、いけない関係だったのか？」

「ああ、いけない関係だったみたいだ。さき、自分たちはお邪魔だからどっかに行こう」  
付き合ってもらえるか。そう思った自分はしんのすけの頭を撫でながら、この場を後にしようとした。

「兄様、しんのすけに構い過ぎなのです。それよりも神代文字を教えてくださいさるといふ約束を、さっさと果たすのです」

「そういえば、おにーさん、神様になって、えらいつよーなつたんやろ？ うちと一回死合わへん？」

「そうだ、ハクよ。せっかくだから、花札をしないか？ あれから鍛えた私の実力を見せてやるぞー！」

「むーむー、ハク様！ 私と一緒に菓子作りしませんか？」

「むむむ、それは重畳！ ハクよ、さっさと菓子を作るのじゃ！ 余に献上せい！」

「聖上、あまりハク殿を困らせてはなりませんよ?」

「そういえば、貴様の菓子を俺もあまり食ってはいないな。この、サコンの飴細工とどっちが上かのう?」

「兄上、お風呂に行かれるのでしたら、僕も。背中をお流しします」

「なら、キウルのせなかはシノノンがながしてやるぞ」

「おーつと、それはまだ、俺の眼が黒いうちは許さないじゃない」

「では、僕たちは宴会の続きといきますか」

「主様、お風呂でろーしょん」

「まっつぶれい、なるものでござんせいでいただきます」

とまあ、ヤマト勢は「あつ、じゃあ、トウスクルの方たちは勝手にやっててください」とそそくさと壊れた宴会場へ戻ろうとした。

「あのく、みなさん、どちらへ?」

「ちよ、待つかなー、ハクもみんなも!」

トウスクルの民であるフィルムイルとクオンは慌てて自分たちを止めようとするが、正直我らとしては「バカらしいから関わりたくない」という気持ちでいっぱいだった。

「ま、ま、待つんだ、クーヤ、サクヤ。私は会いに行かなかつたわけではない。会いにいけないのだ。戻ったばかりの私には、トウスクルの始祖皇としてやるべきことが

山済みであった」

いや、ないだろ。だって、クオンが皇位を引き継いだんだから。

「そーだぞー！ おじさんは、やることがいっぱいあったんだぞーっ！」

その時、自分の脇に抱えられていたしんのすけが声を上げた。

思わぬフォローに一同の視線が一気にしんのすけに集まる。

「お、おい、しんのすけ」

しんのすけは鼻息荒くして、目をキラキラさせながらカンタムを見上げている。

そうか……ハクオロの話が終わったらカンタムで遊べると思ってたこいつ……

「しんのすけくん……君は、私を助けるために……」

「ほう、見たこともない童だな。おい、そのモロ口頭の小僧よ。ハクオロがやるべきこ

とがあつたとはどういうことだ？」

しんのすけの思わぬフォローにハクオロは少し感動し、クーヤという女からは不機嫌

な声が漏れる。

そして、ハクオロのやるべきことがいっぱいあったとはどういうことだ？

その問いに、しんのすけは……

「えっと、えっと、……おじさんは、ウルトおば……ウルトおねーさんのお胸モミモミで

忙しかったんだぞーッ！」

「そう、クーヤ。私はウルトのお胸を……オヴェエエエエ？」

ああ、自分もなんとなく、しんのすけ的にこんなことになるのではないかと思っ  
た。

「まあ、しんのすけだったら……うふふふ、分かっているのね」

「ウルト、何を勝ち誇った顔をしていますの！ しんのすけ、ウルトだけではないと教え  
てやりなさいな！」

そして、ニコニコのウルトリイさんに、便乗するカルラさん。すると……

「えっと、そ、そうだぞー！ おじさんは、きれいなおば……おねーさんといっぱい仲良  
くしてて大変だったんだぞーっ！ カルラおねーさんのお胸モミモミ♪ 着やせだけ  
どボンっと大きいトウカおねーさんのお胸もモミモミ♪ カミュちゃんのお胸もモミ  
モミ♪ うくん、ダメよく、ダメダメ♪ えへへ、うらやましいぞ、おじさん！」

……

「しんのすけくん？」

「ひうっ！」

その時、笑顔が凄く怖いエルルウさんが、しんのすけの頭を鷲掴みにした。

「どうして、私の名前は出てこないの？」

「えっ、だって、……エルルウお姉さん……おらのかーちゃんと同じで……揉むほど、おむねないから」

「……あゝん？」

あれ、本当にエルルウさんだよな！ 社に居た、あの優しい微笑みを見せてくれた、エルルウさんだよな？

そんな時、アルルウは呟いた……

「アルルウは……エルンガーより大きいから大丈夫」と。

すると、悪鬼羅刹となったエルルウさんの怒号が飛ぶかと思つた次の瞬間。

「もう……よ……い……」

カンタムから、深い闇と憎しみを孕んだ声がきこえてきた。

「く、クーヤ、違うんだ。この子はまだ何も分かっていない子供で……」

「……ハクオロ……ハ……ク……ク……ク……オ……」  
口オオオオオオオオツ！」

洒落にならん怒りの風が全てを吹き飛ばすかのように、吹き荒れた。

「余を裏切った罪！ この憎しみを晴らしてくれる！ 立てーツ、カン・タムウ！ 正義の戦士〜♪」

カンタムの目が光り、クーヤの気持ちを表すかのように唸りを上げた。

これは……強い！

「さあ、サクヤ。其方も存分に戦うがよい。かつて、ディーが開発したものの実戦投入されなかった……青き仮面の力を使ってな……足の腱が切られて歩くこともままならなかった其方が……ゲンジマルを超えた力を身に着けることができたことを、ハクオロに思い知らせてやるのだ！」

「御意です！」

「さあ、行くのだ、サクヤ！　クンネカムンに伝わりし、カン・タムウと並ぶ三大禁忌の一つを、見せてみよッ！」

さらに、戦闘モードに入ったカンタムから一つの影が飛び出した。その影は、月夜を背に……

「わーっはっはっはっはっは！　わーっはっはっはっはっはっは！」

あれ？　さっきまで泣き声で話していた……サクヤって人か？

「さ、サクヤお母様？」

「どうしたのだ、サクヤ。お前らしくもない！」

突如盛大に笑いながら、サクヤという人が飛び出した。

暗くてその姿がイマイチよく見えないが、サクヤという人は……

「この世に悪がある限り、命を懸けて戦うッ！」

まっ、自分には関係ないか。さっさと風呂入るか。

とりあえず、ハクオロ……死ぬなよな。じゃ、そういうことで。



## 第9話 乙女の秘密を暴露だぞ

その時、闇夜を背に、カンタムから一人の人影が飛び出した。

全員を青一色に染め、その顔は見たこともない仮面に覆われている。

全身の形状をハッキリと出すような衣服であるために、胸の形で女であることは分かった。

だが、女であれ、男であれ、その身にまとう衣装や身につけている仮面が普通でないことは理解できた。

「さ、サクヤ……なのか？ ……な、なんだそのカツコウ……いや、見たことがある。確か、カンタムと一緒に見たことのあるアニメ……ムツミが凄く好きだったのを覚えている」

過去の記憶を探るように頭を抱えるハクオロ。

するとその時……

「お父様……あれは、もう一人のお父様がこの世に残した仮面……」

ハクオロの傍らでそう呟いたのは、カミュ……カミュ？ いつもの天真爛漫なカミュではない、どこか異質を感じさせる様子だ。

「カミュ……いや、ムツミか……どういうことだ？ もう一人という……あやつか？」  
「そう。かつてクンネカムンに居たお父様が……過去を懐かしみながら作ったもの……あの青い仮面をつけて、……わっはっはっは、とお決まりの構えと同時に声を上げていたところをゲンジマルに見つかり……恥ずかしさを誤魔化すために、これは非常に危険なものだから許可無く封印を解いてはならないとした……」

なにやら、ハクオロとカミュと、ムツミ？ と呼ばれた者たちには、なにやら複雑な関係があるようだが、とりあえずその過去の誰かさん……暇だからって、こんなもん作るなよな！

「わーっはっはっはっはっは！ わーっはっはっはっはっはっは！」

さっきまで、カンタムの中で泣きながら話していた娘と同じとは思えない。

威風堂々として、独特な構えを見せたまま、サクヤという娘は自分たちの前に現れて、高らかに笑った。

「……サクヤ？」

「私はサクヤではない！」

「……えっ？」

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ！ 悪を倒せと我を呼ぶ！ 私は、正義の味方！ その名

も——」

サクヤという女が軽快にいちいち色々な振り付けをしながら叫び、いざ名を名乗ろうとした瞬間……

「アクシオン仮面が女の子になっちゃったぞーっ！」

「そう、アクルカシオン仮面……えっ？ な、なん、で？ なんて知っているんですかー？」

「これまた、しんのすけが目を輝かせて叫んだ。」

「アクシオン仮面、そのお胸どうしたんだー！ かーちゃんや、エルルウ姉ちゃんより大きいぞーっ！」

「しんのすけくん、君は、アレを知って……って、エルルウ？ ちょ、気持ちは分かるが今は堪えてくれ！ 今、かなり大事なことを！」

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「あ、あ、は、母様ア！ 落ち着くかな！ ね？」

禍日神になったエルルウさんをクオンとハクオロが必死に押さえ込んでいるが、それよりも、今は仮面だ。

「仮面……あれも、アクルカの種類か？ 確かに、尋常ならざる気が漂っているが」

「しかし、小生らの持つ仮面とは何かが違う。まるで、仮面に全てが支配されているかのよう……」

「つてことは、あれも兄貴……前帝のように、人工的に作り出された仮面の一つつてことか……」

この中で唯一仮面を所有している、ミカツチ、ムネチカ、自分が冷静に分析する。

そう、アレは今自分が身につけている、ハクオロから譲り受けたこのオリジナルとは違う。

明らかに人工的に作りだされた……

「おい、そのモロ口頭よ……我等クンネカムンの三大禁忌でもある、カン・タムウだけでなく、アクルカシオンを何故知っている？」

「おっ？ アクル何とかじゃないぞ！ アクシオン仮面だぞ！ アクシオン仮面は無敵の救いのヒーローなんだぞ！ ……でも、お姉さんになつてるのはなんで？ んく、でも、おらはこれはこれでいいと思いますな〜」

しんのすけは、カンタムだけでなく、あの仮面まで知っているのか？ あの、クーヤという女もサクヤという女も相当驚いているな。

そうだ、何でしんのすけは知っているんだ？

いや、今は……

「ふつ、まあよい。知っているかどうかなど些細なこと。重要なのは、余の前に、ハクオ

口……そなたが居るといふことだ」

「そうです……ハクオロ様……私たち、ずっとハクオロ様に操をと……ずっとずっとこの身体は殿方には触れさせず……この十数年……ずっと、ずっと……っ！ それなのに、ハクオロ様は、他の皆さんとよろしくやっていたんですねーっ！」

サクヤが飛んだ。「とう」という声と共に、クルクルと回転しながら……

「アクルカシヨン蹴りーっ！」

その時、二つの風が真横を駆け抜け、ハクオロへと向かった。

「はあああっ！」

「ッ！ カルラ……さんっ……」

勢いよく落下しながらの蹴り。それをカルラさんが両腕を交差させて防ぐ。

だが、その威力は激しい轟音を響かせて、カルラさんの両足を地面に埋め込むほどだった。

「ッ、そ、それは少しやりすぎですわ……サクヤ……」

「どいてください、カルラさん！ カルラさんに分かるはずがないです！ ハクオロ様が眠りにつく前までに手をつけられなかったがゆえに、ずーっと生娘のままの私とクーヤ様の気持ちを、分かるはずないんですからーっ！」

乙女の涙と共に、アクション仮面の力が増しているかのように……ってどうか、本人の涙でだけどな……

「だがしかし、聖上を傷つけていい理由にはなりません！」

「トウカさんっ！」

「サクヤ殿、偉大なるゲンジマル様のお孫に無礼を許されよ！ 峰打ち御免！」

もう一つの風が、一瞬で間合いをつめ、蹴りの体勢のままのサクヤに襲い掛かる。

トウカの刃が、サクヤを……

「トウカさんにだつて、分かりませんよ……」

「な……なにつ！」

「お側仕えとか言いながら、夜這いし放題のトウカさんには分かりませんよーっ！」

馬鹿らしい喧嘩と思いつつも、流石にこの光景には、武士たちは目を大きく見開いた。

あの、エヴェンクルガの剣士であるトウカの一撃が、サクヤの人差し指と中指の間で掴まれてしまったのである。

「余所見をしている暇はないぞ、ハクオローツ！」

だが、ポーっとしていい状況ではない。

サクヤに気を取られていたら、カンタムが地響きさせながらハクオロへ。

「カミュ！　そして、ムツミ！」

「分かっている」

これは流石にシヤレにいらんと、ウルトリイさんとカミュが手の平に紋章を浮かべて術を発動。

力ではなく、術の力でカンタムを押さえるつも……

「なっ……こ、これはっ！」

「お、抑えきれ……な……」

すぐに、ウルトリイさんの表情が驚愕に染まる。

何と二人が出した術の紋章が、粉々に砕けてしまったからだ。

「たわけものどもっ！　我がカン・タムウには、術式完全無効化能力を備えておるのだっ！」

待て待て待て待て、暇な時間に作ったにしては、何でそんなに本格的に作りこんでいるんだよ。

「いけません！　クロウツ！」

「ういっす！」

ハクオロがまずい。ベナウイとクロウも前へ出て、二人同時にカンタムを左右から斬撃を叩き込む……がっ……

「硬いッ！」

「……お、おいおい……んだよ、この硬さは！」

その強固な装甲に、刃を弾かれてしまっていた。

「無駄だーア！ 余の無敵のカン・タムウに、人の力など通ずるものかーッ！」

おいおい、術も剣も効かないって、とんでもない無敵じゃないか。

アベルカムの時も思ったが、トウスクルの領土にはとんでもない武器が眠ってたもんだ。

こりゃー、兄貴が生きていた時のトウスクルとの戦争も、最終的にはとんでもない兵器を兄貴は持ち出したかもしれんな。

「静まれ、クーヤッ！ サクヤもだ！」

その時、ただの人でありながら、威厳に満ちた声が響いた。

「ひぐっ！」

「ひいっ！」



思わず情けない声を漏らすのは、クーヤとサクヤ。

その声を発したのは、これまで情けない姿ばかりを晒していたハクオロだった。

ハクオロの表情、それは「これ以上は冗談ではすまない」と真剣味を帯びていた。

「クーヤ、サクヤ……今宵は、同盟を結んだヤマトの方々だけではなく……お前たちにとつても娘であるクオンも居る。客人と愛娘を前に、なんとという醜態だ！」

さ、さすがはハクオロ。クーヤとサクヤがシユンとなつている。

「勿論、私自身が至らなかつたが故に、お前たち二人を傷つけてしまったことは理解しているが、限度というものがあるぞ」

そうか、強さや知識だけではない。

この存在。この言葉。この人を惹きつける何か。

それに、トウスクルの人たちは惹かれ、この男についていったんだ。

なんだか、初めてこいつを尊敬できたような気がする……

「まずは二人とも……私に……顔を見せてはくれないか？ それとも、もう私の顔など見たくもなく、私はお前たちに直接……ただいまを……言わせてもらうこともできないのか？」

これはこのまま、いくか？ というか、ハクオ口の奴、女に対する扱いがうまいな。自分はああいうのは全くダメだと、よくクオンにどやされていたな。

しかし……

「ええい、黙れエ！ そのような言葉で簡単に靡くと思うな、このたわけものめえ！」

一瞬、ハクオ口の説得に応じかけていたものの、クーヤは直ぐに反発した。惜しいッ

！

「何がお胸モミモミだ！ 悪かったな！ あれから十数年の時が経つも、余の胸もそれほど大きくなっていなかったのだからなア！」

「いや、待つのだ、クーヤ、しんのすけ君の発言など気にするな。私は断じてそのようなことでお前たちを蔑ろにしては……そもそも、お前の胸の大きさがどうかなど、会つてもいないのだから分かるはずがないであろう」

「そだぞー！ おじさんは、お胸のないエルルウおねーさんともイチヤイチャしてるから、差別はしないぞーっ！」

グリグリグリ……

「ひ、ひえええ、お、おたすけだぞー！」

「しんのすけくん、誰のお胸がどうだったって？」

「え、エルルウおねーさん、なんでグリグリ攻撃できるんだーっ！」

エルルウさんにより、両拳で頭を万力で締め付けるかのような攻撃を受けるしんのすけのうめき声が上がった。

「クーヤ。私の記憶の中に居るお前との最後は……大英雄ゲンジマルを目の前で失い、精神を崩壊させ……最後には別れの言葉すら告げることが出来なかったお前だった。しかしな……私たちがあなる前に、よく、夜に城を抜け出して、くだらない話を含めて数限りなくお前と時間を積み重ねてゆき……例えば、肉体的にお前たちとの繋がりがなかったとはいえ、お前とは確かな絆を紡いだと思っている。無論サクヤもだ」

「ハクオロ……」

「ハクオロ様……」

「そして今、幾多の試練や時を越え、ようやくこうしてお前たちと会うことが出来たのだ。私にお前たちとの……時間を取り戻す機会を今一度与えてはもらえぬだろうか？」

優しく語り掛けるハクオロの言葉からは、口先だけのものではなく、本心からの二人への親愛を感じ取れた。

その言葉を聞き、トウスクール勢たちも「仕方がないな」と微笑ましそうにしている。

「う、ううう、ハクオロ……お前は、もう一度、余と……こ、この歳になつても未だ生娘というみつともない余すらも、う、受け入れてくれるというのか！ 余だけだぞ？ トウスクールで、まるで経験がないのは、余とサクヤだけだぞ！」

いい歳して、未だ生娘であることの恥ずかしさ。ほく、女もそういうこと気にするんだな。

確かに、男も、何歳まで経験がなければ、魔術師になれるとか、賢者になれるとか聞いたことがあるな。

「ええい、さつきから黙って聞いていれば、その何が恥だというのだッ！」

するとその時だった。

ハクオロでもない。トウスクール勢でもない。

この問題に口を出したのは、意外にも、顔を真っ赤にさせながらも胸を張って叫ぶ、ノスリだった。

「おいおい、ノスリ」

「姉上？」

意外な人物の叫びに、視線が一齐にノスリに向けられる。

すると、ノスリは……

「た、確かに、あなたの言うことも理解できよう。事実、私もそうであつた！ 生娘であることを恥ずかしいと思ひ、見栄を張つていた！ 良い女というのは経験豊富である。そういうものだと思つていた。しかし、……しかし、い、今の私は考えは違ふ！ 女の純潔とは、捨てるものではなく、捧げるもの！ その捧げるべき相手のために取つておいたことを、何故、恥と思ふ必要がある！」

「そなた……なにを……」

「そんなに生娘であることが恥ずかしいのか？ な、ならば、ならば私も言つてやろう！

わ、私は、け、経験豊富な良い女と皆には言つていたが……じ、実は……実は生娘なのだッ！」

顔を真っ赤にしながらも、落ち込むクーヤとサクヤのために自らの秘密を暴露するノスリ。

ノスリ。お前はやはり良い女だよ。  
でも、一つ言うことがあるとすれば……

「「「(いや、知ってたし)」「」」

「いやー、なんと、そーだったのですか、姉上！　しかし、そのことを堂々と告白する姉上の勇氣に僕は感服します！」

「「「(いや、オウギ、お前が知らないはずないだろ)」「」」

ゴメンな、ノスリ。どー考えてもお前は生娘だというのは分かっていた！

あと、オウギ、お前、本当に面白がっているな。

しかし、このノスリの暴露は意外にも状況を大きく変えた。

なぜなら、これに便乗して……

「まー、せやけど、それならうちも生娘やえー。操を上げる人は決まっとなるんやけどな、まあ、それはこれからやえー。ルルやんもそやろー？　好きな人にあげるんやから、

取っとくよな〜？」

アトウイが援護するかのようには、クーヤに慰めの言葉を贈った。

「は、はうううっ！　あ、アトウイ様、どど、どうしてそこで私にふ、振るんですか！」

い、いえ、その、き、きむす……でも、私だつて……いつかハク様と……ううう……でも、その、す、好きな人以外になんて絶対に嫌ですから、わ、私もそれが恥ずかしいことだなんて思いません！」

き、聞こえてない。自分は何も聞こえていない。

「おー、それなら、シノノンもきむすめだぞー。キウルにあげるけど」

「くー、娘にお赤飯を炊く日も近いじゃない」

「いや、シノノンちゃん、意味分かつてる？ ヤクトワルトさんも笑わないで！ ちよ、

ね、ネコネさん？ そ、そんな顔で僕を見ないでくださいー！」

「……あまりにも、低俗な会話過ぎて眩暈がするのです」

こころこら、シノノンとネコネには、まだまだ早いぞ？

「あらあら、なら、クーヤ様、サクヤ様。なくんにも気になさることはないですから。私

たち、みくんな、生娘です。ね？ ウルウルちゃん、サラアナちゃん」

「ファミルイル、いみふ」

「私たちの穴という穴、純潔はとうの昔に主様に——」

もらつてないもらつてないもらつてない。

「こ、これは、小生も答えねばならないのでしょうか？」

いや、無理して答える必要はないぞ、ムネチカ。

だが、その時、何だか自分は猛烈に嫌な予感がした。

それは、勘。本能。そして細胞が告げていた。

乙女たちの「生娘暴露」を前にして、自分は物凄くこのままではまずいという気になった。

だって、あれだろ？ この話の流れだと、やっぱり全員に話が行くよな？

となると……

「ええい、まだるっこしい！ 生娘がどうした！ 余とて生娘だ！ しかし、それは決して恥ずべきことではない！ 捧げるべき相手をずっと待ち続けることを、誇りと思えど恥等と思うことはない！ 我等も生娘といえど、ようやくハクを見つけたのだ！ ならば、時間の問題！ そしてそなたらも、ハクオ口皇とようやく再会できたのだ！ これから捧げればよからう！」

皇女さんもまた、生娘暴露を堂々とし、そしてその想いをクーヤとサクヤにぶつける。

いや、正直皇女さんは自分にとっては姪っ子みたいなもの……まあ、チーちゃんには、お嫁さんになってあげるとか言われていたけど……ってそうではない！

そう、クーヤとサクヤが皆の「生娘暴露」に心が揺れ動いている中、もしこの話が、このままあいつに及べば……全てが台無しに！



「のう、クオン！ そなたも何か言つてやるのだ！ 愛する男を想い大切にとつておいたのなら、生娘等恥ずべきことではないとな！」

「……………へっ……………？」

「そなたも生娘であらう！」

あつ……………皇女さんから……………クオンに振られた……………

「えつ、あ、アンジユ、き、生娘つて……………えつと……………だ、だって、わたくしは、ハクともう……………遺跡で……………えへ……………えへへへ……………」

——ゾワリ。

「ねえ、どうしよつか、ハクく？ や、やつぱり、みんなにはまだ、内緒にした方が、いいかな？」

「…………………………」

場が一瞬で凍りついたような気がした。

そして、クオンが照れながら、でも嬉しそうにしながら、何だか幸せそうに……………

「え、えつと、ま、まいったかな。う、うん、好きな人を取つておいたものは全然恥ずか

しくないかな……で、でも、それをわたくしが言っても嫌味かな……だって、わたくしは……もう……ハクと……ふふふふ」

その時、トウスクル勢は察した。

「く、クオン……お、お前まさか……」

口を半開きのハクオロ。

「まあ、……やはり、そうだったのね、クオン。どうりで大人っぽくなったと思っていたの」

嬉しそうなエルルウさん。

「あら、わたくしはとつくに気づいていましたわ」

冷やかすように笑うカルラさん。

「あらあら、クオンったら、いつのまに大人の仲間入りしていたのね」  
娘の成長に微笑むウルトリイさん。

「は？ へ、ど、どういうことでありますか？」

一人よく分かっていなさそうな、トウカさん。

「うわ、ハクちゃんっいたらいつの間に。どうしよつか、アルちゃん」  
イタズラっこの顔を浮かべるカミュ。

「……………クーをキズモノにした」

真顔で一言呟くアルルウ。

「だーはっはっはっは、こいつあーめでてえ！ お嬢の成長は嬉しいような、泣けてくるっつーか！ 若大将が居たら、泡吹いて気を失ってたぜ」

腹抱えて笑うクロウ。

「ハク殿。あなたは、われらが皇女に手を出したにも関わらず、逃げ回っていたのですか？」

そうと分かれればもう逃がさねーぞと殺気を飛ばしてくるベナウイ。

あ、いや、ちよつと待ってくれ……………みんな……………

そして、ヤマト勢も

「は？ へ？ な、えっ？ なななな、えっ？」

顔を真っ赤にしてうろたえるノスリ。

「は……………クオンはん……………いつの間に抜け駆けしてたんやな」

あ、アトウイさん？ 瞳孔が開いた目で、そんな真顔で言われると恐いぞ？

「あつ……………お菓子作り……………そうです、私がハク様と一番上手に作れますから……………そうです、ああ、鍋でお菓子を作っていたんです……………ハク様の幸せを望むのが私の役目ですから……………ハク様の幸せが私の幸せですから……………」

ルルティエー……ッ！　なんか、お玉で空鍋をかき混ぜて現実逃避……ど、どうした？　何か別の意味で恐いぞ？

「おー、あねごはてがはやいぞ。キウルもはやいほうがいいか？」

「なくんだ、旦那も姉御もヤルことヤツてるじやない」

「……は、あ、あにうえがく、クオンさんと……お、おちよにやのかいだんを……」

「ふぐつ、ひつぐ、うう、あ、あにさまとあねさまが、私を置いて遠いところに行つてしまったのです……」

ま、待て、シノノン、キウル！　泣くなネコネ！

「まあ、クーちゃんつてば。もう、大人になったのね♪」

「いみふ。妄言乙」

「ウソに決まっています。主様の気を惹くためです。だって……クオン様のお腹の中……中に誰も居ませんよ？」

嬉しそうなフミルイルに、こちらは物凄く恐くなったウルウルとサラアナ。

そして……

「せ、聖上、お、お気を確かに！　聖上！」

ムネチカが血相を抱えて呼びかける。そこには、ムネチカの腕の中で倒れている皇女さんが……

「は、はははは、く、クオンよ、なな、何を言うておる……そそ、そなたは、き、生娘であらう？」

明らかに動揺しまくった皇女さんが、何とか言葉を搾り出すも、クオンは勝ち誇った顔をして……

「だから言ったかな？ しんのすけの母様役は、わたくしが一番適任つて。ね？ ハク

♪」

さてさて、いい加減、自分もしんのすけと風呂に……

「……む……娘に先を越された……」

「クオン様が私より先に……」

と、そんな中、誰よりもシヨックを受けていたのはこの二人だったかもしれない。

それは、クーヤとサクヤ。

「は、ははは、ハクオロ……ははは、こ、滑稽ではないか……のう？ よ、余にとつても愛娘であるクオンが、す、既にき、生娘ではなく、母たる我等が未だ生娘なのだからな……は、はははは、は……」

その時、先ほどまでとは比べ物にならないほどの瘴気がカンタムとアクション仮面か

ら。

すると、その瘴気を発したまま……

「やはり許さああああああん、ハクオロオオオオオ！ ついでに、そこの仮面の男も、許さああああああん！ 娘が大人で、母たる余が生娘とはなんたることかあ！」  
「うわああああああああん！ もうどうなろうと構わないですーっ！ アクルカシヨンビイイイイイイム！」

どわあああああああ、なんか、怒りが自分にまで飛び火した！

## 第10話 世界の窓からこんにちはだぞ

「仕方がない。ウルトリイ殿、この国を覆っている封印の力を解いて戴きたい。自分もまた、力を解放しましょう」

このまま何もしないでボコボコにされるのはまずいから、さっさと大封印を解いてくれと頼んだ。

しかし……

「「「却下」」」

なんと、ヤマト勢……というか、女性陣が盛大に却下した。

「おにーさん、仮面の力を使うなんて言わんといてーな。それでうちらどれほど悲しんだと思うん？（本音おにーさん、力取り戻したら、なんやうちと契る前に逃げ出しそーやからな。もう逃がさんえ。クオンはんにだけやなんて……うち……ゆるさんえ?）」

「そうだぞ、ハク。私たちはいつまでもお前に頼ってばかりの私たちではない（本音：なな、くく、クオンは生娘でないだど? で、では、は、ハクの子種的なものを……ま、ま、ま、ずい、わ、私も早く……）」

「そうです、ハク様。ですから、仮面を使うだなんて言わないでください（本音：クオン様とハク様が既に……いいえ、まだ手遅れではないはずです。なら、私ももういつまでも怯えてなどいられません。ハク様が力を失われている今こそ……ココポの力を借りてハク様を誘拐して……どこか遠い遠い山奥で……二人つきりで……永遠に……）」

「そうだ、ハクよ！ 仮面の力はそなたにどれだけの負担を与えようと思っている！

軽々しく使うことは許さん！（本音：もし、ハクが力を取り戻せば、この件で余らが詰め寄ろうとしたら、姿を消して逃げ回るに決まっておる。もう逃がさぬのじゃ。絶対に契るのじゃ！ クオンなんぞに遅れたままでいられるか……クオンなんぞにつ  
！）」

「主様の力がないうちに強行手段」

「三日ほど休みなくすれば、すぐにクオン様を追い抜きます」

なにやら、自分が力を取り戻すことが色々な意味で反対なようで、皆の言葉にウルトリイさんも苦笑している。

すると、ネコネまで……

「あこさま……」

ネコネが自分の裾を掴んで来た。



アクルカは命を削る力ゆえ、それを使う自分をいつもネコネは悲しそうな顔を浮かべていた。

しかし今は……

「もう絶対に逃がさないのです」

逃げたらブチコロス。そうその目が語っていた。

「し、しかしだな、皆。流石に自分も戦わないとアレは……」

カンタムとアクシヨン仮面。この二つを前に自分も戦わねばと皆に言おうとしたが

……

「くだらん！ このような太古の遺物が、何の脅威かッ！ 我は鳴神なりっ！」

「アクルカよ、小生に力をッ！」

「まっ、相手になるじゃなーい」

「トウスクルの方々に、かつての恩を返します！」

「では、参ります！」

ミカツチ、ムネチカ、ヤクトワルト、キウル、オウギがトウスクルの援護をすべく飛び出した。

「邪魔しないでくださいっ！ アクルカシヨンピイイイイイム！」

「鎮守のムネチカ、推して参るッ！」

アクション仮面から放たれる光線。ムネチカが前面に出て、壁を作って防ぐ。

「ええい、邪魔するなーッ！ カン・タムウよ、あんなもの蹴散らしてやれッ！」

「久々に全力を出すか……うおおおおおおおッ！」

ミカヅチがカンタムに。

雷を纏った激しい剣を勢いよくカンタムに叩きつけていく。

だが……

「効かぬッ！」

「むっ！」

「余のカン・タムウは無敵だーッ！」

ビクともしていない！ あのミカヅチの攻撃をまともに受けて。

「ミカヅチ様ッ！ 援護します！」

即座に矢で援護するキウル。しかし、カンタムの装甲は現代の人智を超えるものでも

あった。

雨のように降り注がれるキウルの矢を受けても、全く効果がなく弾かれている。

「そ、そんな……」

ミカヅチ、キウルの攻撃だけではない。

「これは、確かにアヴ・カムウを超える硬度ですね」

「おいおい、こりゃー、反則だぜ」

トウスクールが誇るベナウイとクロウも、カンタムの硬度に冷や汗をかいている。

「さくらに……」

「いきますわよッ!」

「某も参る! 一つ、二つ、三つ!」

「僕も合わせます! 行きますッ!」

速度、技術、破壊力。ヒトの力を極限に高めたものたちの一斉攻撃がアクション仮面に向けられるも、アクション仮面は雄叫びを上げて飛ぶ。

「とわああああああ! 私は負けるわけにはいかない! この世に悪が居る限り、決して屈つしはしないっ! アクルカション・蹴り!」

勢いよく回転しながら落下して、地面に大穴を空ける。

まともにくらえばひとたまりもない。

にしても、なんていう身体能力だ。

「ちよつと、きびしいじゃない」

「あやや、危なかつたな」

流石の皆も顔を青ざめさせるほどの力。

「覚悟せよ、ハクオロ。そしてその仮面の男。余の心と余の娘をキズモノにしたこと

を、思い知らせてくれる」

「覚悟してください〜！」

「なんとということだ……、クーヤ、サクヤ！ 落ち着け、もうこれ以上暴れるのはやめろ！」

「そうかな、クーヤお母様、サクヤお母様！ 別に、先を越されたとかそういうの、気にする必要はないかな！ わたくしはハクが好きで、お母様たちは父様とこれから時間を取り戻す、それでいいんじゃないかな？」

カンタムロボ。

アクシヨン仮面。

ふざけた存在かとも思うが、その力は本物だった。

そして、もはや愛する男と愛する娘の声すらも届かぬほど、二人はお怒りのようだ。しっかし、何でその怒りを自分にまで向けられなければならない。

「ダメに決まっておるであろう、クオン！ いくらなんでもクオンの歳で……せ、……接吻など早すぎるのだ！」

えっ……？

その時、その場に居たものはみな、小首を傾げた。

「「「せ……接吻？」」」」

「ぐつ、くうう、よ、余ともあろうものが、なんともはしたない言葉を……おのれえ」

接吻……？ ん？ どういうことだ？

トウスクルの人たちも、サクヤという女も、首をかしげてカンタムを見上げている。

「えつと、クーヤ様……あの、何を……接吻ってどういうことですか？」

「サクヤ、いつまでも余を子供扱いするではない！ 愛し合う男と女が唇を重ねると、子を授かるのであろう！ それぐらい、余とて知っている」

接吻……それで子供ができる……あくはいい……そういう……

「い、いや、あのですね、クーヤ様。こ、子供って、接吻だけでは出来ないんですよ？」

「な、なんと！ それは誠か？ で、では、クオンは身ごもっているわけではないのだな  
！」

「えつと、そ、それは分かりませんけど……」

「つ、しかし、クオンは既に生娘ではないと！ では、生娘でなくなるにはどうするのだ？ 接吻すればよいのではないのか！」

こ、これは意外な展開になつたぞ。

カンタムとアクション仮面が変なことで揉めている。

そしてどんだんアクション仮面ことサクヤが動揺し始めている。

「いや、えと、その、せ、接吻は間違いないんですけど、えっと、その、わ、私の口からは、えと、その、ぼぼ、ぼっ、つきした……その、だ、男性の、い、ん、の、いんけ……い……いを……」

「いんけ？ いんけとは何だ？」

「あああああああ、もう、何で私が言わないといけないんですかー！ おチンチンのことですよ、おチンチン！」

……このとき、トウスクールとヤマトは一つになって、あることを思った。

——面白そうだから、もう少しこのまま見てみよう

……と。

「おちんちん？ なんだ、そのおちんちんたらしとは。それは一体、どのようなものなの……？」

「ひっぐ、そ、その、だ、男性の……こ、こか……ッ、言えませんがオオオオオオオオオオオオオッ、っていうか、何で誰も助けてくれないんですか！ ハクオ口様嗚呼ああああ！」  
「な、ど、どうしたというのだ、サクヤ！ まだ、話は終わっておらぬぞ！ その、おち

んちんとは一体なんなのだ！」

限界だった。サクヤは頭を激しく抱え、アクション仮面としての振る舞いなど完全に出来なくなっていた。

純粹に聞いてくるクーヤって人、生娘とはいえ一体いくつなんだ？

「確か十数年前……初めてサクヤをクーヤが私に紹介してくれた時、言っていたな。サクヤは床上手……と。そう、サクヤの敷いてくれた布団で眠ると気持ちいのだと……クーヤ……変わってないな」

ハクオロが目を細めながら呟くと、トウスクール勢も笑わずにはいられなかった。

ああ、あの人、そういう教育全く受けてないのか……何だか色々残念な人だ……

「ほっほーい！ ちんちんはこれのことだぞ」

「……なに？ なっ、も、モロ口頭、そなたいつの間に！」

「へっ？」

「「「なにっ？ ……って、あああああああああつっ！」「」」

それは、誰も気づいていなかった。

さつきまで足元に居ると思っていたしんのすけ。

なんとそのしんのすけが、どうやったのかは知らないが、いつの間にかカンタムの肩の上によじ登っていた。

「ちよ、しんのすけーっ！ 危ないかな！」

「しんのすけ、降りるのです、危ないのですッ！」

「しんちゃんッ！」

慌てて叫ぶも、しんのすけはカンタムの肩に乗ってご機嫌の様子。

そして……

「ぞーさん、ぞーさん、オラはにんきもの〜」

……既に下穿きを脱いでいたしんのすけは、自分の下腹部を晒して、歌いながら踊っていた。

「……………」

すると、クーヤは一瞬言葉を失って無言になるも……

「ふ、ふ、ふ、ぶぎやあああああああああああああああああああああああああああ！

な、なんなのだそれはあああああああ！ ひいひい、ガクガクブルブルガクガクブルブル」

突如暴れたカンタムロボは怯えた子供のようにその場で蹲った。

振り落とされるかと思ったしんのすけも、クルクルと回転しながら普通に着地……っ



て、だからお前は何者なんだ！

「く、クーヤ様ア！」

「ほっほっ、ぞーさん、ぞーさん」

「くっ、ちよ、下穿きを穿きなさい！」

「ねーねー、女アクシヨン仮面く、オラとライン交換しないく？ モロロはそのまま派？

それともタレで食べる派？」

な、な、か、カンタムが戦闘不能に？

チンチン出して走り回るしんのすけに恐怖したカンタムが震えている。

そして、サクヤもまた、クーヤほどではないが慌てているのが分かる。

「クーヤはまるで情操教育を受けておらず、そしてサクヤもクーヤほどではないにしろ、男に対する免疫がまるでないのだな……」

「父様。これ、父様の責任かな？」

「い、言うな、クオン」

しっかし、ミカズチたちの攻撃を受けてもなんとまあなかつたカンタムがこんな簡単に

……

そして、あのサクヤという人にも効果があるようだ。

「ちよ、いい加減にしまいなさい！ わ、私は昔、お兄ちゃんが居たことがあって、子

供の頃に見たことがあるから、だ、大丈夫なんですから！ で、でもしまいなさーい！」

「ふふくん、おねーさん！ 安心してください……オラ、穿いてますよ！」

「……穿いてないじゃないですかーッ！」

「おお。んもく、せつかちなんだからくん」

溜息はきながら、下穿きを履き直すしんのすけ。だが、今のしんのすけの行動により、活路を見いだせた。

なるほど。兄が居たから、クーヤほど怯えはしない。

だが、それも五十歩百歩。目くそ鼻くそを笑う程度の差。

子供のチンチンなら、まだ耐えられるか。

ならば大人のは？

それにより、この状況を打破できるのであれば……

「勝機！ 某、勝つためなら何でもヤル」

それが自分の導き出した打開策だった。

「ハク？」

「ッ！ まさか、あにさまっ！」

その時、自分の思考を真っ先に読み取ったのは、ネコネだった。

ネコネは涙目になりながら自分の裾を掴んだ。

「ダメなのです、兄様！ もう、これ以上はダメなのです！ あにさまが、あにさまでは無くなってしまうのです！」

「ネコネ……」

「もう、嫌なのです！ あにさまが、どんどん、一人で堕ちてしまうのは耐えられないのです！ これ以上、あにさまが……」

それは、ヴライ、ミカツチ、タタリ、ウオシス。かつて、強敵たちとの戦いにおいて、自分が命を削る仮面の力を使うたびに泣かせてしまっていたネコネを思い出させた。

「今、某は……ほろ酔い気分」

「あ、あにさま……」

「ゆえに今ならば、酒のせいにすることもできるやもしれぬ」

これ以上、大切な兄を失いたくないという切なる願い。

その願いが心を打つ。

しかし……

「許せ……ネコネ」

「兄様ツ！」

「某、この流れに乗らねば、しんのすけに遅れを取るようになる」

「や、いやああああああ、あにさまあああああああああ！」

「我が下穿きよ。扉となりて根源への道を解き放て！」

そして、自分下穿きを脱いで、全てを解放した。

その姿に、トウスクル勢は「あらあら」と子供のヤンチャに笑う母親の様子を。

ヤマトは全員呆れて顔を俯かせる。

しかし、某は引かぬ！

「へっ……」

完全に硬直したサクヤ。某のアレを見て石化しているようだ。

やはり、子供の男の子のアレは大丈夫でも、大人の男のアレはダメだったようだ。

だが、これでは終わらん。

攻刃の型で追撃だ！

「ブルブル体操！」

「はっ、へ……えっ？」



「相手にとって不足なし」

「クオンよ……あの男で……本当によいのだな？」

「う……うん、父様……ハクでいいの……でも、アレは今後控えさせるかな」

……いや、みんなガン見で石化しているのは、皇女さんとノスリだけだった。

まあ、構わぬ。

これならば、最小限の犠牲で……

「ほっほーい！ ハクとーちゃん、お下品だぞーッ！ ならば、オラもオラもー！」

すると、しんのすけが再び動いた。

だが、今度は下穿きを脱ぐわけではなく、下穿きの中に右腕を突っ込んで、下穿きの股間部分の……あれは……古より伝わりし、「社会の窓」ではないか！

すると、しんのすけは社会の窓をずり降ろし、

「世界の窓からこんにちはず♪ 世界の窓からこんにちはず♪」

二の腕を突き上げるように社会の窓から出す、しんのすけ。

それは一瞬、そして遠目から見たら、五歳児とは思えぬほどの剛直と、誰もが勘違いしてしまう子供のイタズラ。

しかし、

「ブルブルブルブルー！」

「世界の窓からこんにちは♪ 世界の窓からこんにちは♪」

その瞬間、石化したサクヤがそのまま気を失って倒れ、その衝撃で、サクヤが身に付けていた仮面が地面に落ちた。

仮面が落ちた瞬間、身に纏っていた独特の衣服も解除され、元の布や絹で出来た衣服を纏った女の姿があらわになった。

勝利を確信した自分は、下穿きを履き直し……

「勝った。苦しい戦いであつ、ふあああつ！」

「もう……黙るのです……あにさま……あ、あ、ん？」

そう呟いた瞬間、ネコネが杖で自分の後頭部を思いつきりぶん殴った。

ぐつ、だが、これでカンタムもアクション仮面も……

————ピ——————！！

その時、ガタガタ震えているカンタムから、耳鳴りのような音があった。

そして……

————運転を、手動からオートへと切り替え、パワーアップ形態へと移行します

なにつ？

————正常合体

その時、カンタムの上半身と下半身が分離。

分離した半身が入れ替わるように再合体。

すると、緑一色に染まっていたカンタムロボの機体が赤く染まった。

「もう……許さぬ……余の目を犯したそなたらを……許さぬ」

機体の中から聞こえる、闇に染まったクレーヤの声。

「この、超カン・タムウ……その恐ろしさ……毛穴の奥まで思い知るがよいッ！」  
な、なんだそれはっ!?



## 第11話 裏切りはよくないぞ

「ちい！ いい度胸だ……アレはもう破壊する」

「待つのは、ミカツチ。いくらなんでも、こんな馬鹿らしいことにアクルカの力を使うのは許さぬのじゃ。ハク同様に、その仮面はそなたにとつても負担であろう！」

「しかし、聖上……今、奴に對抗できるとしたら……」

超カン・タムウと呼ばれし、真つ赤に染まった機体。

操縦者のクーヤを動揺させれば何とかなると思つたが、まさか、自動操縦になるとはな。

「おおおおお、超カンタムだぞ！ じゃあ、超超カンタムもあるのか！ ほっほーい、すごいぞすごいぞー！」

自分と一緒にクーヤとサクヤに精神的な痛手を負わせたしんのすけは、カンタムの変形に興奮して喜んでいるが、正直、シヤレにならんだろう。

「うおおおおお、余の瞳を犯した罪、決して許しはせんぞオ！ そして、サクヤの仇だ！」

「ま、待つかな、クーヤお母様！ ハクはこんなんだけど、わたくしの夫だから、許して

ほしいのー!」

「許せるかアアア! ぶるぶる体操だか何だか知らぬが、あんな恥知らずの男を夫にするなど、草葉の陰でハクオロが泣いておるぞ!」

「いや、だから、父様はここに居るかな!」

「クオンの母としても、そのような男とクオンを結婚させるものかア!」

正に、アベルカムの完全殲滅モードのように手当たり次第に拳を地面に叩きつけていく、超カンタム。

破壊力も速度も、大幅に上がっている。

つていうか、もう、完全にアクルカを解放したかのような力だぞ?

「父様も言つて欲しいかな。ハクは確かに、お下品なところもあるけど……それでもとっても素敵な人だからって!」

「う、うむ……まあ、私もクオンの婿は彼しかないと思つていたのだが……しかし、オシウトルとして動いていた頃の彼からは想像もつかぬほどの……」

「うっ……た、確かに、あ、あの時のオシウトルになつていた頃のハクも、凛々しくてかっこよくて……でも、わ、わたくしは今のハクがいいかな! 今のハクこそ、ハクの本当の姿で、わたくしのハクなんだから!」

「……クオン、お、お前の選んだ男は、酒に多少酔つたとはいえ、あんなことをするもの

なのか？ ……ぶるぶる体操など……」

どうやら、ハクオロもクオンの男を見る目に少し心配になっているようだ。

これもまた、最小限の犠牲によって出てしまったもの。

これじゃあ、クーヤを怒らせただけでなく、自分がトウスクルの人たちからも失望されただけという……

「許してなるものかア！ 散るがよい、変態め！ 邪魔するものもまとめて蹴散らす！」  
拳を叩きつけ、そして足踏みして、地震のように巨大な衝撃を何度も起こす。

近づいただけでもひとたまりもないぞ。

「ハク、今すぐ謝るかな！ 誠実な態度で、わたくしを娶るということを今すぐクーヤお母様に言つて、安心してもらうしかないかな！」

「いや、待て、クオン。もうこの人……話を聞く様子もないぞ？ それにだ……そんな恥ずかしいことを言えるはずがないだろう」

「なっ！ なんてかな！ ぶるぶる体操はできるのに、どうしてそういうことを恥ずかしかるかな！」

もう、戦うというよりも、被害が及ばぬように逃げ回るしかない。

誰もが少しずつその場から後ずさりする中で、クオンが「言つて！」と自分に訴えるが、正直、そんなことを堂々と宣言するのは恥ずかしい。

「おおお、ハクとーちゃん、ピンチだぞ？ 超カンタムが出たら、超超超超超……えっと、とにかくカンタムはいっぱいパワーアップするぞ！」

「ぐっ、旧人類め、なんとという無意味なことを！ パワーアップばかりの戦いなど、何も生み出さないとこのに」

「おお、ハクとーちゃん、カンタムも前同じことを言ってたぞ？」

「くそ……なんとか、あの自動操縦されているカンタムを止める手はないのか？ ……パスワード！ ……くっ、やはりダメか！」

自分の力は相変わらず封印の力で戻らない。もはや、ブルブル体操も通用しないだろう。

そんな自分が、あのカンタムをどうやって……

「ん？ ……そ、そうか！ その手があったのじゃ！」

その時だった。

「あ、アンジュ様？」

「聖上、いかがされましたか？」

その時、さつきまで自分とクーヤのことで正気を失っていた帝さんが、瞳を光らせた。

何かを思いついたかのように。

「クーヤ殿と申したな！ そなたの言うとおり、余もまた、クオンとハクの婚姻を認めて

おらぬのじゃ！ 二人は、これっぽっちも、ちくちくともお似合いではないのじゃ！」

いや、帝さん？ あんた、急に何を言っているんだ？

「あ、アンジユ？ 何を言っているのかな？ わたくしとハクほどお似合いなのはありえないかな？」

「いや、ぜんっぜんお似合いではないのじゃ！ そう、ハクはやはり余のような選ばれし高貴なるものこそ相応しいのじゃ」

急に、ワケのわからないことを話し出した帝さんに、誰もが顔をキョトンとさせた。

「そなた、異大陸のヤマトの帝か……随分と話が分かるではないか……そう、その仮面の男とクオンが夫婦になるなどおかしいのだ」

「そうであろうそうであろう！ やはりここは、二人を引き剥がすことが互いにとつての利点となるのじゃ！」

あつ……ああ、そういうこと……

何となく、帝さんの考えが分かった。

すると、自分と同様に、皆もその考えを理解したようだ。

「な、なに？　ど、どういうことだ！　クオンとハクがお似合いでないならどうだというのだ？　……クオンはトウスクールに……で、結婚できなかったハクはヤマトに……ッ！　そういうことか！」

「あく、そういうことなん？　せやなく、おにーさんがヤマトに居てくれたほうが、うちも都合ええからなく」

「そ、そうなんです！　クオン様とハク様のご結婚は色々と問題があると思いますので、お二人のために、ここはハクさまをヤマトに連れ帰るのがいいと思います！」

「ぐっじよぶ」

「その案は大変素晴らしいものだと思います。では、主様、クオン様など忘れて私たちとヤマトへ」

ノスリ、アトウイ、ルルティエ、ウルウル、サラアナは理解したようだ。

すると、帝さんは彼女たちを従えて……

「クーヤ殿、我等も加勢するのじゃ！　共にこの二人を引き剥がすのじゃ！」

「はははははは、素晴らしい案だ！　余もそなたらを気に入ったぞ、ヤマトよ！　承知した、我らの力で、クオンとその仮面の男を引き剥がす！」

ちよつと待てエ！　話が変な方向に行つてないか？　そもそも、クーヤが怒っていた

のは、ハクオロの所為なのに！

「い、いや、クーヤ？　こ、この男は私も知っている。確かに愉快なものではあるが、彼が居たからこそ私もクオンもこうして「黙れハクオロツ！　そなたも後で覚悟するがよい！」……はい」

「ハクオロさん！　何でそんな弱腰なんですか！　クオンを未亡人にしてはならないと言ったのは、ハクオロさんなんですよ？」

「ええ、主様。少々ヤマトの方たちがお戯れていらっしやいますが、クーヤと一緒にまとめてお仕置きして差し上げますわ」

「我等も大神を連れ去られるのは望みませんし、母としてもクオンを悲しませるわけにはいきません」

「ヤマトの方々、ハク殿は渡さぬ！」

「そだよく、ハクちゃんとかーちゃんの結婚は邪魔させないから！」

「全員、ボロボロのオポロボロにする」

「やれやれ、なんだかわけわからなくなっちゃまいやしたね、大将」

「ですが、……ハク殿は絶対に逃がしません……」

身構えるトウスクール勢は完全交戦体制。

いかん。いかんぞ。いかんですよ……

結局、こんなことで、ヤマトとトウスクルの戦争が？

ヤクトワルトやキウルたちも、呆れて笑っているだけ。

ネコネは……

「……あねさまとあにさまの結婚は大賛成なのです……でも、そうなるとお二人はずつとトウスクールに……でも、結婚しなければ、あにさまだけはヤマトに……エンナカムイに……うううう、ど、どうすればいいのです」

いや、悩むな、ネコネ。

「ええい、ちよつ、待て待て待てえー！ 今、シャレに、なら、ないから！ 争うなあ！

みんなでタタリ浄化の旅に行こうという話を昼間したではないか！」

「ハク！ ちよ、クーヤお母様もみんなもやめるかな！ ハクはわたくしの最愛の人なんだから！ 本当にこれ以上は怒るかな！」

カンタムのゲンコツ。カンタムの足踏みから逃げ回りながら叫ぶ。

もはや、オシユトルだった頃の振る舞い方なんて忘れてしまった。

「しっかし、本当にまずいじゃない、旦那」

「そうですよ、兄上。な、なんか、聖上もルルティエ様たちも、皆さん、こんな状況な



のに物凄く恐い顔して、本気ですよ！」

「はあ、聖上……あとで、小生が尻を千回叩いて仕置きをしますが……ハク殿、いかがなされる？」

「アクルカの力を持ってしても、あの巨大な人型兵器を討つのは容易いものではないぞ」「ええ、ですので、ハクさん。ここは、姉上たちと一緒に、もうヤマトに帰ったらどうですか♪」

「ダメです、オウギさん！　ハク様は、クーちゃんのお婿さんなんですから、引き剥がしてはダメなんです」

唯一自分の立場で、トウスクールともヤマトの女性陣ともいがみ合わずに味方で居てくれる、ヤクトワルト、キウル、ムネチカ、ミカツチ、オウギ、ファミイル。

しかし、彼らの力を結集したとしても、トウスクールとヤマト女性陣を掻い潜りながら、あのカンタムを討つ作戦が思い浮かばない。

すると……

「お……おとおお、オラ、アクション仮面になっちゃったぞーっ！」

「……………えっ？」

それはまた、ほんの少し目を離れた途端だった。

自分としんのすけの挟撃により気を失っているサクヤ。

そのサクヤから外れて落ちていた青い仮面。

その仮面をしんのすけは……

「ば、ばかやろうっ！ なにやってんだ、しんのすけ！」

「わーはっはっはっはっは！ わーはっはっはっは！ アクシヨン仮面参上だぞーっ！」

青い仮面を装着した途端、しんのすけの衣服が青い特殊な衣装へと変化した。

仮面は兜のように頭を覆い、光を発しながら、しんのすけを変化させた。

「なにいつ！ モロロ頭、貴様、仮面の力をッ！」

「おーし！ ハクとーちゃんを、オラがおたすけするぞーっ！ アクシヨンビーム！」

「ビビビビビビビビビ！」

しんのすけから放たれる光線。その光線が超カンタムを包み込む。

その威力は、僅かながら、カンタムをうろたえさせている。

「おとおお、やるじゃないか、しんのすけ！」

思わぬ力に場が揺れる。

しかし、

「ええい、うざったい！ ちょっと危ないからどっかに行っておれい、モロロ頭ッ！」

「おっ？」

「だがしかし、下がらず……そしてその仮面も外さぬというのなら……」

その威力は、超カンタムという規格外の存在を相手にするには、到底力が足りるものではなかった。

それどころか、クーヤを余計にイラつかせている。

このままではまずい。

そう思ったとき、

「モロ口頭、貴様はこいつに遊んでもらうがよい！ 旧クンネカムン三大禁忌！ 兵器のカン・タムウ！ 仮面のアクルカ・シヨン！ そして、最後の一つは……召喚ッ！」

召喚？ クーヤの宣言に、思わずネコネとウルウルたちを見た。

召喚といえば、式鬼とかキリポンとか……

「いでよ！ ブルタンタ佐衛門！」

ボンッと煙が突如音を立てて発生する。

「大いなる父が残した遺産！ 亜人種の研究の一つとして生み出されし、伝説の怪物として封印されしものよ！」

カンタムに続き、またとんでもないものを出現させようってのか？

ブルタンタ？ 伝説の怪物？

一体……

「ぶぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ、もう少し……ん？」

「「「「「……えっ？」」」」」

煙が晴れて中から出てきた……いや、クーヤの力によって召喚された伝説の怪物。

それは確かに、ブルタンタの顔をしている。

体の大きさは、しんのすけぐらいか？

まあ、それはそれとして……なんだその体勢は？

「……………」





「コンピューター社会がまだまだ確立されていないような時代に……あわや世界を支配しかけたウイルスを開発した……」

「思い出した！ あの、大袋博士が開発させたという、幻のコンピューターウイルス！ ぶりぶりざえもん！」

カンナム同様に、それはまたあまりにも意外すぎる単語で、あまりにも特殊すぎる名前……

「で、なんで、しんのすけ（くん）が知っているんだ？」

謎が深まるばかりだった。

## 第12話 お助けだぞ

「ブルタンタ佐衛門！ 早くケツをしまつて、戦うのだ！ 其方を召喚した余の命令を聞くのだ！」

ぶりぶりざえもんという、あまりにもこの世界の文明からかけ離れた名称を、まさかしんのすけの口から聞くとは思わなかった。

あらゆるコンピューターに侵入をし、乗っ取ることも破壊することも可能と言われた、伝説のコンピューターウイルス。

しかし、それは名前のみが噂として語られていただけで、実際にそのウイルスが発動されたことはなかった。

それゆえ、伝説でもあり、幻でもあるぶりぶりざえもん。

だが、なぜしんのすけがその名を？

「おい、私に命令をしているのか？ 人に気安く指図するな、このボケえー！」

「……………ん なっ!？」

「人にものを頼むなら、お願いしますだろう！ そして、お助け料は100億万円だ。なお、救い料の支払いは現金はもちろん、ローンや小切手、更にはクレジットや郵便振込



みも可とする」

「……あ、その、す、すまぬ……後生の頼みだ……」

そして、このぶりぶりぎえもんとかいうブルタンタ。召喚主であるクーヤの命令に対してすごい反抗的だぞ？

クーヤも予想外過ぎて反応に困っている。

「本当に私に悪いと思っっているのなら、私の尻を舐めろ」

「……………」

「さあ、早くしろ。尻が冷える」

驚きと、衝撃に続く衝撃で、もはや自分たちはどう反応していいか分からなかった。

「……なんだか……しんのすけに似てるかな」

「ええええええ！ クオンちゃん、おら、あんなお下品じゃないぞーっ！ あんな風に尻ばっか出すなんて恥ずかしすぎるぞーっ！」

「……「全く同じじゃないか」……」

ケツをカンタムに向けて腰を振る、ぶりぶりぎえもん。

ブルブル体操で精神的ダメージを受けたほど、初心なクーヤに向けてなんということ  
を……

「カン・タムウよ……あの禍日神を消滅させ——」

「さて……仮面の小僧よ！ お前が私の相手か。果たして私に勝てるかな？」

低い声を出したクーヤがカンタムの拳を振り上げて、ぶりぶりざえもんに振り下ろそうとした瞬間、ぶりぶりざえもんはパツと態勢を変えて、態度を変えてきた。

その額にわずかに汗が滲み出ているのが分かった。

こいつ……あんなエラそうに出てきておいて、ビビったのか？

「ぶりぶりざえもん！ おらだぞ？ おらが分からないの？」

「やかましい！ この状況なら、もう戦うしかねーだろボケエ！ いざ、勝負ッ！」

ぶりぶりざえもんが、溜息を吐きながら、アクション仮面になったしんのすけを見据える。

その視線を受けてしんのすけは、仮面で顔を隠しているものの、その小さな背中がどこか悲しそうに見えた。

「……………分かったぞ……………ぶりぶりざえもん、おらと勝負だ！」

しんのすけは、ぶりぶりざえもんを知っていた。

そしてこの反応は、ただ知っているだけではなく、何かもつと別の繋がりが？

そう思っしてしんのすけに問いかけようとするも、アクション仮面となったしんのすけは、顔を上げて足を一步前へ踏み出した。

「お、おい、しんのすけ……………」

その、決意を秘めたような、今までにないしんのすけの力強い言葉に、自分たちは驚いてしまった。

「止めちゃダメだぞ、ハクとーちゃん」

「しんのすけ！」

「男の子には、退いてはいけない時があるんだぞーっ！　いくぞー、ぶりぶりざえもん！」

走り出したしんのすけ。

「いぎ、尋常に勝負ッ！　チエケラッ！」

ぶりぶりざえもんも真つすぐ走り出した。

「とりやああああああああああああ！」

「でりやああああああああああああ！」

走り出した二人が、今、衝突するかと思った、その時だった！

「おらのちんちんの方がおつきいぞーっ！」

「なにをーっ、私のちんちんの方が大きい！」

「おらのぞうさんは最強だぞーっ！」

「私のちんちんが最強にきまつてる！」

二人とも下穿きの中を見せ合い、一歩も引かずにお互いに詰め寄っていた……

「おい、そなたら……………なにを……………」

「……………どつちがでかい？」

「ツ！ なんだそれはあああああああああああつ！ ま、真面目にやらぬかあああ！ 下穿きを上げるーっ！ くだらぬものを見せるなーツ！」

分かる！ クーヤ、分かるぞ、その気持ち！

自分たちも叫び出してしまったかった。

「くだらなくなんかないわよね〜ん」

「そうよ〜ん、あいつ見たことないのよきつと」

頬を染めて、オカマ口調になって身を寄せ合う、しんのすけとぶりぶりざえもん。

に、似てる……………この二人……………やはり、何かがあるぞ！

「それより、しんのすけ！ 何で、お前がぶりぶりざえもんを知っているんだ！ お前はぶりぶりざえもんのなんなんだ？」

「ん？ ぶりぶりざえもんは、救いのヒーローでおらの友達だぞ？」

「……………えっ？」

思わず聞いてしまった二人の関係。その問いかけに、しんのすけは当たり前のように答えた。「友」と。

「な、なんだと、おい、ブルタンタ佐衛門！ 長らく封印されていたそなたが、そのモロ

口頭の小僧と友とはどういうことだ！」

「ふむ……………友か……………」

「おい、ブルタンタ佐衛門！」

「……………」

友。そう呼ばれたことに、ぶりぶりぎえもんは何かを考えているかのように黙る。

ウソでも出鱈目でもな——

「こ、答えよ、ブルタンタ佐衛門！ 答えによつては、そなたも敵とみなし、この超カンタ・ムウで滅ぼし——」

「さあ、かかってくるがよい、貴様ら！ 貴様らが全員束になってかかってくようとも、この私……に代わつて、このカンタムが貴様らを倒してくれよう！」

「……………つて、ライツ！」

全員ズツコケて同じツツコミをしてしまった。

だつて、何だか、ぶりぶりぎえもんとしんのすけが本当に過去に何かあつたのかかと思つた矢先に、ぶりぶりぎえもんはシレつとカンタムを背に、自分たちに向けて宣戦してきた。

「ちよ、ちよつと待てい！ お、お前、しんのすけと友達とかそういうんじゃないのか？」

「何を勘違いしている。私は友の味方などではない。私は強いものの味方だ！」

「んなっ！」

「そんなこと、当り前〇のクラツカーだ」

な……なんとというセコイことを堂々と……

「なんと不愉快なブルタンタか！ それでも剣士か！ そなたの腰の剣が泣いているぞ  
！」

「べーっ！ これは千歳飴だもんね、ペロペロ」

「つゝゝゝゝっ！ ええい、そこに直れ！ たたつ斬つてやる！」

「トウカお母様も落ち着くかな！ とにかく、今は、このブルタンタ何とかと、あのカン  
タ・ムウをどうにかするのが先かな！」

とにかくだ、コンピュータウイルスとしてはその名は知ってはいるものの、このぶ  
りぶりさえもんそのものは、そこまで強くはなさそうだ。

小さくて、少しすばしっこそうな感じはするが、トウスクルとヤマトの武士たちに比  
べれば、そこまでのものとは思えない。

だからこそ、今は、やはりあの超カンタムをどうにかすること。

「つつ、まあよい。なぜ、こんな下品で役立たずなブルタンタが禁忌とされていたかは知  
らぬが、気を取り直して……仮面の男オ！ ハクオロオ！ 覚悟オ！ ヤマトの娘ども

も余に続くのだア！ モロ口頭の小僧も、お尻ペンペンしてくれるっ！」

「「「オオオオオーツ！」」」

「カンタ・ムウの飛び出す拳を受けてみよッ！」

「行くぞ！ 暴れてくれようぞ！」

「ハク様！ 今、ハク様の身も心も私たちが保護します！」

「連れて帰るぞ、ハク！」

「ほな、いゝゝつぱいヤリ合おうな、おにーさん」

そして、もう、ぶりぶりぎえもんは見なかったことにと、気を取り直したクーヤが、ルルティエたちを従えて再び声を上げる。

「えええ、おらも？ いやだぞ、怖いぞ！ ピンチだぞ、お助けだぞー！」

ハクオロ。自分。そしてついには、ここまで散々クーヤを不快にさせていたしんのすけすらも、クーヤの標的になったようだ。

流石にしんのすけも慌てて後ろに下がって、自分の影に隠れ……

「助けてーッ！ ぶりぶりぎえもー……」

そう叫んだしんのすけ……。いや、そいつに助けを求めるなって、しんのすけ。

あいつは敵なんだから。

ほら、向かってくる、カンタムと帝さんたち側について、まるで戦う気は――

「……………ふう……………やれやれ……………もう少し遊びたかったが……………それでも、ちんちんが付いているのか?……………しんのすけ」

それは、確かに聞こえた。

風見鶏のような態度だったぶりぶりざえもんの声が、確かに聞こえた。すると、その時だった。

「ツ、こ、これはっ! 一体……………」

その異変に真っ先に気付いたのは、ウルトリイさんだった。

「オンカミヤムカイの大地が……………震えて……………」

そして、すぐに自分たちも気づいた。

地震? それは何の前触れもなく起こった。

まるで、地の底から何かが飛び出してくるかのような……………

「なんだ、これは! 一体、何が?」

「聖上、一体? おさがりを!」

「クーヤも止まれ! な、何か、何かが下から来るぞ?」



この瞬間ばかりは、敵も味方もなくただ、状況が分からずに混乱してしまった。そしてついに、その地上へと飛び出してきた何かが自分たちの目の前に現れた。それは……

「ツ、え、……え、ええ？」

なんで、これが今？

「あれは……ゲート？」

そう、ゲートだ。

オンカミヤムカイの地の底にあったと思われる、ゲート。

既にマスターキーも消失したことで、既に起動しないと思われていた、大いなる父の遺産。

しかし、これはどういうことだ？

「お、おい、ハクオロ、アレ！」

「ああ……どういうことだ？ 光が……起動している？」

ゲートが光、まるで何かを転送しようとしているかのように動き出した。

「ばかな、何でマスターキーがないのに……」

そう、なぜ、マスターキーがないのに？ そう思ったとき、一人だけやけに落ち着いた様子のぶりぶりざえもんが……



「あれはまさか……大いなる父の遺産……」

「間違いない！ ウオシスが聖廟で小生らに見せた、大いなる父たちの世界の記録で、確かに似たようなものが！」

車。自動車だ……ばかな、なんで？

しかも、誰かが乗っている。

男？ それに女と、赤ん坊と、犬の音が……

「そ、それに、ちよつと待って！ い、今、あの箱から、ハクの音が……」

「ええ？ でも、おにーさんここに居るやん」

「しかし、僕も確かに、兄上の声が……」

「どういふことなのです！ 一体、何が起こっているのです！」

中から聞こえた声。しかも、しんのすけの名前を……

「これもまあ……人助けだ。……………無断でお前をこの時代に遊びに  
来させた、詫びもあるしな」

ぶりぶりぎえもんは、ただ、淡々とそう呟いていた。

## 第13話 うたわれ一家ファイヤーだぞ

現れたのは、車輪のついた騒々しい箱。

この世界の文明からすれば明らかに異質な車。

馬が引かなくても自動で動く車。それが自動車。

それは、遙か昔、星の環境を破壊する原因の一つとしても語られていた、排気ガスを撒き散らしながら人を運ぶ道具。

自分も、実物を見るのは初めてだ。

「緑のセダン……な、なぜ……」

ハクオロの呟き。セダン？ 確か、自動車の形状の一つだ。

ということとは、やはりアレは、自動車なのか？

「なんなのだ、貴様らは！ ブルタンタ佐衛門、何をした！」

この状況に自分たち同様に頭がついていかない、クーヤ。

ぶりぶりぎえもんは黙ったまま。

すると、自動車の扉が左右勢いよく開け放たれ、中から血相を変えた男と女、赤ん坊、そして一匹の白い小さな犬が飛び出してきた。

「しんのすけええええ！」

「しんちゃあああん！」

「にいいにいいあああ！」

「キャンツ！」

やはりだ！ さつき、聞こえたのは、気のせいなんかじゃない。

しんのすけの名前だ。

「ちよ、ハクの声！ しかも……オンヴィタイカヤン……」

「は、驚いたわ。顔は全然似とらんけど、おにーさんと声がそっくりや〜」

しんのすけの名前を呼び、さらに自分と声が似ている男。

そして何よりも、あの表情。ずっと、命を懸けて必死に大切なものを探し、それをよ

うやく見つけられたかのような表情。

ああ、そうか……この人たちは……

「おおおお！ とーちやーん！ かーちゃん、ひまーっ！ シロー……！」

この人たちが……しんのすけの……『本当』の家族なんだ。

しんのすけが両手を広げて飛び跳ねた瞬間、現れたしんのすけの『本当』の家族は走り出し、力いっぱいしんのすけを抱きしめた。

「しんのすけええ！ ば、かやろう、心配させやがって、このやろう！ だ、大丈夫か！  
どこか怪我してないか？ どこも悪くないか？」

「おおお、おげんきそーですなく、みなさん」

「うっとううう、もう離さない！ とーちゃん、絶対にお前を離さないからなー！ これ  
で、野原一家復活だ！」

涙でクシヤクシヤになって、鼻水すらも流しながらしんのすけを抱きしめる男。

赤ん坊を抱えながら、涙を流しながらしんのすけの額と自分の額をつけて擦り合わせ、温もりを感じあっている母。

ニタ／＼と笑いながら嬉しそうな赤ん坊。

涙を流しながらも笑顔で吠えて回りを駆け回る犬。

これが、しんのすけの家族か。

「あにさま……………」

「ネコネ？」

「私はここにいます……………」

その時、どこか訴えるような表情で、ネコネが自分の裾を引っ張ってきた。

その表情が語っている。今の自分の心中を察しているかのように、ネコネの瞳は、「自分が居る」と訴えていた。

「もはや、何が起こっているかがまるでわからぬ。モロ口頭……おぬしら一体、何者だ？」

その時、カンタムからクレーヤが発した。

その声に、しんのすけの家族は顔を上げ、涙で晴らした顔から一瞬で両目を見開き、慌てて二度見。

「ひえええええ！　ななな、なんでカンタムが！　ここは一体、どこの世界なんだ？　異世界か？　未来か？　別の惑星か？」

「あ、あなたあー！」

「あういわああー！」

「クウ〜ンン」

この人たち、しんのすけに気を取られて、カンタムにも気づいてなかったのか！

だが、そうやって情けない悲鳴を上げているものの、しんのすけの父は全身を震わせながら、両手を広げて前に立った。

「く、くるなあ！　家族には指一本触れさせねえ！　やるなら、俺をやれ！　だがな、覚悟しろ！　俺は高校時代……空手部の奴とクラスメートだったんだ！」

そう叫び、男は車から何かを取り出した。

それは刀？　いや、鞭？　真ん中に持ったための柄があり、左右の棒が鞭のようにしな

る。

「ほわあああああ、ちよわああああ、どりやああああ、でりやああああ！」

「ぬ、なんだ、その武器は！」

「ほわちやああああ、でりやああああ、はいいいいいいっ！」

カンタムを威嚇するかのようには棒をしならせる。

いや、待て……あれは武器じゃないぞ！

「ぼ……ボディブレードだ！」

「な、なにに？ ボディブレード？ ……思い出した！ あれは、運動不足解消用のエク

ササイズ用品だ！ 自分もブルブル体操をする前は愛用していた！」

ハクオロと自分は、もはや驚いてばかりだった。

何でボディブレード？

「父様、ハク、ぼ、ぼでいぶれいどつてなに？ 何だか凄く強そうかな！」

「うむ、あのような武器は小生も見たことがない」

「あれは、大いなる父の武器なのではないか？」

しかし、この世界の者から見れば、どこか怪しく只ならぬ武器にしか見えないのだらう。



そりや、あんなの見たことないだろうから、ハツタリにはなるだろう。

でも、あんなのじやカンタムを倒せるはずないし、そもそもあれでハツタリかますなんて無茶苦茶すぎだぞ。

「えええい、何かは分からぬが、余の邪魔をするのならば、容赦はせん！」

ほらな！ カンタムが拳を振り下ろした。

「ぎよわあああああ」

「ひいい、あなたああつ！」

まずい！ 気づけば、トウスクールもヤマトも、一時は争いかけた者たちも、自然と体が動いていた。

「あら、少し性急過ぎですわ、クーヤ」

「つたく、本当に何が何だか分かんねーぜ！」

「ちよつ、まっつーな」

「しかし、分からぬが体が自然と動いてしまうのじや」

「分からぬが、ここは退かぬ！」

カルラさん、クロウ、アトウイ、帝さん、ムネチカ、怪力集が力を合わせてカンタムの拳を受けとめた。

いかにカンタムが強力とはいえ、あの五人が力を合わせれば！

「ウルト、カミュ、ベナウイ、アルルウ、彼らを！」

「キウルも頼む！」

「「「承知！」」」

自分とハクオロの指示を放たれるまでもなく、他のものたちも動く。

「もう、安心ですよ」

「は、へっ？ ……おや、これは美しいお嬢さん。あなたのような美しい方は初めて見ました。どこのお方ですか？」

「はい？ えっと、私はこの、オンカミヤムカイの者ですが……」

「おんかみやむかい？ 奇遇ですね。自分は秋田出身です」

……ウルトリイさんが羽ばたいて、しんのすけの父を……いや、どこら辺が奇遇なんだ？

怯えた表情が一変して、ウルトリイさんを見た瞬間、キリつとした顔に……

「とーちゃん、ダメだぞ。ウルトおば……おねーさんは、あそこに居るおじさんの奥さんで人妻だぞ？ ちなみに、ここに居るカミュちゃんも奥さんだぞ？」

「んも、しんちゃんってば、嬉しいことを言ってくれるね♪」

「ん……そういえば、今気づいたけど、カミュちゃんの声ってタミさんに……」

「タミサン？」

ナンパする父を嗜める、カミュに助けられたしんのすけ。

「ご無事ですか？ ご安心を、我等がお守りします」

「あらやだ！ 超イケメンッ！」

ベナウイに目を輝かせるしんのすけの御母さん。

「あの、えっと、僕がどうかしましたか？」

「えへへへへ、きやおおお！」

「おつ？ 何だお前、キウルにちよつかい出すのか？ シノノンの好敵手ってやつだな

？」

「おおお、シノノンにもついに宿敵と書いて友が出来たじゃない！ くうくう！」

メチャクチャしまりのない、しんのすけと似た笑顔を見せる赤ん坊はキウルに……

何なんだ、この一家は！ 状況分かっているのか？

「来る。シロ」

「くきゆうん」

一番まともなのは犬だけか？ っていうか、アルルウ、あの犬の名前を……

っていうか、結局、この人たちは何のために登場したんだ？ 状況がまるで変わって

いないぞ？

「おい、ぶりぶりぎえもん。これは一体どういうことだ？ お前が何かをやったのか？」

「……………」

これに何の意味があったのか。自分は我慢できずに、ぶりぶりざえもんに問いかけた。

だが、ぶりぶりざえもんは、剣に模した飴を舐めているだけで、質問に答える様子がない。

「にしても、どういうことだ、しんのすけ！ カンタムが暴れるし、この世界も良く分からないし！ 俺たちはお前が公園で消えたっていう話を聞いて、きつと公園に何かあると思つて車で公園に侵入して待機してたらこの状況だ！」

ウルトリイさんに助けられて、改めて状況を聞くしんのすけの父親。

その問いに対してしんのすけは……

「んく……あのカンタムに乗つてる人に、そこに居るハクとーちゃんが大人のぞうさんを見せたら怒つちやつたんだぞ？」

「なにいいいいいいいっ！ しかも、とーちゃんく？」

「待て、しんのすけ！ いや、色々と途中を省きすぎだ！ お前も、ぞうさんを見せたらうが！」

「ほうほう。ん、それに、このおじさんがたくさんのお奥さんとイチャイチャしていたら、ずっとほったらかしにされていた奥さんの一人が怒ってこんなことになったんだぞ」

「ま、待ちなさい、しんのすけくん！ それも色々と省き……省き……いや、まあ、そうなのかもしれないが……」

「たくさんのお奥さんって？」

「んで、そのハクとーちゃんはお似合いで、でも、あのカンタムに乗ってるクオンちゃんのお母さんは二人を認めないから、おじさんとハクとーちゃんの二人を倒そうとしているんだぞ？」

「しんのすけ！ ……お似合いは、事実だから……別にいいかな」

しんのすけの説明は、色々と省略しすぎて、両親には何が何だか分かっていない様子だ。

だが、正直なところ、彼らにとっては、しんのすけの説明等、あつてもなくても同じ様子だ。

「とにかくだ、あのデカイのを倒さないといけないわけだな、しんのすけ！」

「だったら、倒してやろーじゃないのよ！ そうしなきゃ、あたしたちも帰れないんで

「しよ?。」

「おう! ブッラジャーだぞ、とーちゃん、かーちゃん!」

「あういうやあ!」

「キャン」

大した説明なんていらぬ。それでもこの人たちは、それでいいんだ。

そこに見える確かな絆。

強く。そして逞しい。

自分がこの数日間、繋いだと思えるしんのすけとの絆なんて、これに比べたら……

「よーっし! じゃあ、久々、野原一家、ファイ——」

「待つんだぞ、とうちゃん!」

拳を突き上げて叫ぼうとした父親をしんのすけが制する。

「ここは、うたわれ一家だぞ、とーちゃん」

「なにい? うたわれ? なんだそれは?」

「なんだもなにも、そーなんだぞ。な? ハクとーちゃん」

「つたく、わけがわかんねーが、まあいいか! それじゃあ、あんたらもいくぞ!」

そう言つて、しんのすけは自分を見た。

そうだろ？　と言われた瞬間、自分はガツンと頭を殴られたような気がした。

「しんのすけ……」

そうだ……そうだ。何故、自分はさつきからこんな情けないことばかりを考えている？

しんのすけの両親に、嫉妬するようなことを。

しんのすけが両親と親子としての絆があるからって、それがどうした。

自分にだってある。

その絆を、比べるな！　誇れ！

「ああ、そのとおりだ、しんのすけ」

「あつ、声が似てる……」

夫婦のツツコミは無視して、今は自分もしんのすけに応える。

「ハクオロ、クオン、皆もだ。分かっているな？」

自分が皆に尋ねると、全員が同じ笑顔で頷いていた。

さつきまで、クーヤに加勢していたヤマトの女たちも同じだ。

だからこそ、自分たちは叫ぶ。





## 第14話　またまた一件落着だぞ

「なぜだ！　何故、余の邪魔をする！　余の何が間違っている！」

挟撃。挟撃。ひたすら挟撃！

カンタムの攻撃力も防御力も関係ない。

高揚した自分たちは一丸となり、次から次へと攻撃を叩き込んだ。

連撃。術。必殺の一撃。

これは、あの最終決戦で、クオンから発せられたウィツアルネミアと対峙した時の自分たちと同じ。

どこまでも高揚して力が増した。

「ぐっ、えええい、うぎったいわああ！　まとわりつくな！　超カン・タムウを舐めるなあ！」

関係ない。

我等が一丸となった時の力は、大神すらも打ち破るのだ。

太古の遺産の一つや二つ等、軽く蹴散らしてみせる。

「うりゃああ、主婦のヒップアタック！」

「くらえええ、営業マンの靴下攻撃ーっ！ 足臭いキーツク！」

「アクシヨンビームツ！」

それに、今はこの頼もしい一家も居る事だしな。

「氣力を失つたら一旦下がるです！ 私が回復させるのです！」

「怪我をしたって、わたくしが全部直してあげるかな！」

「はい、私たちにお任せ下さい！」

体力が落ちてこようと、回復の体制も万全だ。

自分たちは、カンタムの足にまとりつくように、次から次へと攻撃を叩き込んだ。

その勢いは、無敵のカンタムに乗ったクーヤを取り乱させるほどだ。

「ハクオロ、これをつ！」

「ぬっ……この鉄扇は……」

「今だけ貸してやる。いや……今だけ、返してやる。自分には、このオシユトルの剣があるからな」

「ふっ……そうか。ならば、遠慮はいらん。久々に私もやるとしよう！」

ハクオロに鉄扇を渡し、自分も刀を抜いて構える。

同時に走り出した自分たちは、左右から同時にカンタムの足に必殺を叩き込む。

手ごたえあり！ 発せられた渦がカンタムを捻るように吹き飛ばす。

「なぜだ！ 余は……余もサクヤも何も間違っていないであろう！」  
カンタムの機体から、悲鳴のような声が響いた。

「愛しき男に忘れられただけでなく、その男は他の女とイチャツキおる！ 余もハクオ口の妻となりて毎日イチャイチャしたり甘えたりしたいのだぞ！ それに、我が最愛の娘は下品な変態男に手籠めにされてキズモノにされた！ そんな男との結婚等破談させてやる！ それの何が悪い！」

義は自分にこそあると主張するクーヤ。

そして、ハッキリいつて正論過ぎて、自分もハクオロも言い返すことが出来ない。

だが……

「ぎっけんじやないわよーっ！」

「ふっぎけんじやねーっ！」

自分でもハクオロでも、ヤマトでもトウスクールでもない。

クーヤの言葉に叫び返したのは、しんのすけの父と母だった。

「妻として夫とイチャイチャしたい？ あんたが言うほど妻も母親も簡単じゃないのよ！ いつも早起きしてご飯作って、寝坊して起きた子供を幼稚園に毎朝送って、旦那の少ない給料でやりくりしながら家事をして、言うこと聞かない子供を叱って、家族のた

めに毎日働く旦那を支える！ やることなんていっぱいあるんだから！ 甘えてイチャイチャすることだけが嫁の仕事だと思ってるんじゃないわよ！ でもね、その大変なことこの積み重ねの毎日こそが、妻の幸せなのよ！ 旦那が居て、しんのすけが居て、ひまわりが居て、シロが居て、そんな家族と過ごすことこそが妻の最高の幸せつてもんなのよ！ それが分かんないやつが、妻とか母とか言ってるんじゃないわよッ！」

「俺だつてもし、ひまわりの選んだ男が、いきなりチンチン出してくるような変態野郎だつたらぶつとばしてやる！ ぶつとばして、その上で腹割って話して、一緒に酒飲んで、そいつの目を見て、ひまわりが笑顔かどうか見て、それでひまわりの結婚式では号泣してやるんだ！ ぶつとばすのも結婚反対も分かるが、娘が本当に幸せになるかもしれねーってんなら、一度信じて向き合ってみるのが親つてもんだらうがっ！」

妻の言葉と親の言葉。

そして、それは自分たちの口からは出てこない言葉でもあった。

今、自分たちの中には、親となって子育てをしているものはいる。

だが、自分やハクオ口のような特殊な存在ゆえに、この場に居る男も女も、誰もが夫婦となつて子供を産んで家庭を育んだことがあるものは居ないのだ。

だからこそ、クーヤもまた言葉を失っていた。

このクーヤという人が、どれほど悲しくツライ運命を送ってきたのかは知らない。だが、そんなこと関係ないのだ。

妻なら。親なら。その言葉がクーヤを深く貫いた。

「だが……お前をそうさせたのもまた、私の罪でもある」

そんな中で、ハクオロは鉄扇を掲げて呟いた。

「クーヤ。私も親としても夫としてもまだまだだ。本当にすまなかつた。お前をそこまです追い込んでしまい……もちろん、サクヤにもそうだ」

「……ハクオロ………余は………余は」

「今こそ、お前を全ての呪縛から解放しよう。そしてこれからは共に成長していこう。クーヤ。今度はもう……離れたりはしない」

ハクオロもまた、しんのすけの両親の言葉が胸を貫いたのだろう。

そして、全ては自分の責任だとクーヤに詫び、その上でもう一度鉄扇を構える。

「ハク……お互い大変だろうが……それでも……」

「ああ。自分も………気持ちと同じだ、ハクオロ」

俺はハクオロに頷いて、オシユトルの剣を構える。

「惚れた女をもう泣かせない！」

これが最後の一撃だ。すべてのケジメを、今こそつける。

「おお、おじさん！ ハクとーちゃん、オラもオラもーっ！」

自分とハクオロの間に入るしんのすけも、両腕を前に構える。

「ああ、そうだな、しんのすけくん」

「当たり前だ、しんのすけ。何故ならこれは全て……お前から始まった……お前のおかげで、ここまで辿りついた」

「ほうほう、それでは最後はご一緒ですな」

笑って頷き合う三人。

そして、これが最初で最後の三人の挟撃。

「風陣乱扇ッ！」

「白燕乱舞ッ！」

「アクションビームッ！」

閃光と激しい渦が、カンタムを包み込み

---

「そうだ……まだ、言っただけな。クーヤ……」

「ハクオロ……」

「ただいま。クーヤ」

「ッ！ この……たわけもの……めが」

——全てが晴れたときには、もう決着はついていた。

閃光が晴れ、大破したカンタムの破片の瓦礫の中から出てきたクーヤに、微笑みながら語りかけるハクオロ。

その回りには、トウスクルの者たち、そしてクオンが涙目で笑いながら、寄り添っていた。

「クオン……」

「なにかな、クーヤお母様」

「……幸せか？」

「ッ！ もちろんかな！ それで……これからも、その幸せを育んでいくの。ハクと一緒」

「……そうか……」

すると、クーヤは頷いて、今度はこつちをチラつと見てきた。

「おい……その貴様。クオンを不幸にしたら……今度こそ殺す!」

本気の殺気を込めて睨んでくるクーヤ。

すると、回りの女たちも一斉に笑い出した。

「あら、クーヤ。心配いりませんわ。その時は、この私もハクを殺しますもの」

「ええ。我らの娘を不幸にするのなら、たとえ相手が大神だとしても」

「うむ、某の刃の錆びにしてくれよう」

「みんなで、ハクちゃんやっちゃうから、クーヤン、その時は力を貸すよ」

「アルルウもやる」

ああ、そうだろうな。もし、自分が今後、クオンを本当に不幸にしてしまったら、その時ばかりはトウスクールは自分に手を貸すどころか、総力を挙げて自分を抹殺するだろうな。

それを分かっているからこそ、頷くしかない。

ちよつと自信がないが、自分も頷き返した。



「ほうほう、これで一件落着ですな、ハクとーちゃん」

「だな。よく頑張ったな、しんのすけ」

ああ、本当にそうだな、しんのすけ。

そう思つて、自分がしんのすけの頭を撫でようとした、その時だった。

今まで黙つて静観していた、ぶりぶりぎえもんが突如口を開いた。

「ああ……………本当に……………これで終わりのようだな。そして……………私の……………願いと役目も……………」

その眩きと同時に、しんのすけの両親を出現させたゲートが、再び光り輝いた。

しかし、それだけではない。

「ぬっ！ お、おい、ブルタンタ佐衛門！」

「ど、どういことかな！」

「おい、ぶりぶりぎえもん！」

「あつ、ど、どうしたんだぞー、ぶりぶりぎえもんー！」

目を疑つた。突如、ぶりぶりぎえもんの身に起こつた異変。

まるで自分やヴァイやオシユトルが、仮面の力を使い果たした時のように、ぶりぶり

ざえもんの肉体が崩れていく……

「長らくメンテナンスもされていなかったのに、スペックを超えた力を使いすぎた……ゲートを使った時空移動も……これで最後だ……」

ぶりぶりざえもんは、何を言っている？

だが、これではまるで、ぶりぶりざえもんがそのまま……

それに……

「やはり、お前は……コンピューターウイルスぶりぶりざえもんをモデルにした亜人ではなく……ぶりぶりざえもん本人ということか？　しかし、ぶりぶりざえもんは、既に消滅したウイルスと聞いていたが……」

クーヤを抱きかかえながら、神妙な顔で尋ねるハクオロ。その問いにぶりぶりざえもんは低い声で答えた。

「私ほどになると違う。確かに、私はコンピューターのデータ上消去された。しかしそれは、『消去した』という記録がコンピューターに残るだけであり、その存在を完全に消滅することはできないのだ。ただ、眠っていたただけだ。大災厄の際に、何者かが私を持ち出して、肉体を与えて封印していたようだがな……」

「そ、そんなことが……」

「その娘に封印を解かれなければ、ずっと眠ったままだっただろう。まあ、それも遅すぎたがな……もう、この世界は、コンピューター等なんの意味もない世界に変わり、私の存在意義すらも無くなった」

それは、さつきまでしんのすけとチンチンを見せ合っていたり、ケツを突き出していたぶりぶりざえもんとは思えぬほどの語り。

そして語られる真実。

「私のことを誰も知るものが居ない世界と時代……せめてもう一度……友と並んで何かを見たかった……研究所の遺産を見て実行した」

友？ それって、まさか……

「だが、それもこれまでだ。私の肉体が減れば、もう二度と復活することはできん。ゲートも起動することは出来ん。だから……しんのすけ……今のうちに、とつとと帰れ」

そして、真実と同時にぶりぶりざえもんの口から語られたのは、非情とも言える今生の別れの宣告だった。

## 最終話 おしまいだぞ

もう二度と？ だから今のうちにとつと帰れ？ そんな急に……

「おいおい、なあ、どうなってるんだよ、しんのすけ。本当にここはどこで、この人たちは誰で、それで一体何が起こってるんだよ」

「そうよ！ 大体、ぶりぶりざえもんがどうしているのよ！ ちゃんと説明……って、ちよつとあんた！ 体が！」

「あういやああ！」

あまりにも急な展開で、しんのすけの両親と妹もぶりぶりざえもんに食ってかかる。

だが、そんなことをしている時間すらも無いと、ぶりぶりざえもんの崩れていく肉体が物語っている。

「ぶりぶりざえもん！」

流石に事態の深刻さを理解したしんのすけの表情は明らかに動揺している。

すると、ぶりぶりざえもんは崩れかかる肉体を何とか動かして……

「ふん！」

しんのすけの股間を握った……

「立派だぞ。……相変わらずな」

「ぶりぶりぎえもん……ッ、ふん！ ……そっちも立派だぞ」

しんのすけも、ぶりぶりぎえもんの股間を握り返した。

互いに互いの股間を握り合うという訳の分からない状況。

普段なら、「何やってんだ」とゲンコツしたくなるような光景だ。

しかし、今だけは違った。口も手も出してはいけなさと、自分を含めて皆が分かっていた。

「……文化も時代も何もかもが違う世界……そこに私の役目すらもなく……だからこそ……もう一度……私ほどでなくとも、私に匹敵するチンチンの大きさを持っているものと、会ってみたいと思った……」

「……ぶりぶりぎえもん……ううん、オラのほうが大きいぞ……」

「馬鹿！ この状況なら、黙って泣きながら領け！」

ぶりぶりぎえもんが語る真実。ほとんどのものが理解できないだろうが、自分には分かった。

「ぶりぶりぎえもん……お前は、しんのすけを……時空を超えて呼び寄せて……それじゃあ、しんのすけは……やっぱり、過去の世界から……」

大いなる父の遺産として封印されていたものの、正直な話、もはやこの世界にも文明

にも何の意味もないものとなった。

自分を誰も知るものが居ない世界。自分の役目も何もない。

だからこそ、もう一度会いたかった。寂しかった。そんな心情を感じ取ることが出来た。

でも……

「待て、まだ諦めるな！」

このまま嵐のように勝手に現れて、そのまま過ぎ去らせるわけにはいかない。

「ここはオンカミヤムカイ！ 大いなる父の遺跡がある。その技術を使えば、まだ、ぶりざえもんを復活させられるかもしれない！ そうすれば……」

そうだ。まだ、手はあるはずだ。

「ハク……」

「あにさま……」

ここにある技術を使えば、まだ何とかなるかもしれない。

幸い、今ここに自分がある。ならば、大昔のコンピューターウイルスぐらい……

「なあ、だからまだ帰るなんて言うなよ、しんのすけ。せつかく仲良くなれたんじゃないか。また、遊んだり、騒いだり、風呂入ったり……お前にお礼だって……」

「ハクとーちゃん……」

「なあ、だからそんな寂しいことを言うなよ」

このままお別れなんてしたくない。

だから自分は必死になって……

「ハクー！」

「兄様……だめなのです……」

だが、そんな自分を悲しそうな表情で、クオンとネコネが抱きしめてきた。

ああ、分かっている。自分だって何を言っているか分かっている。

かつて、アマテラスを再起動させ、そしてマスターキーが壊れた瞬間から、もう過去の技術呼び起こしてはならないと思っていた。

「ハク様……お気持ちは、お察しします」

「ウルトリイさん……」

「私も、過去に似たようなことがありました。ある出来事がきっかけで、一人の赤ん坊を育てたことが。そしてその子を心から愛し……でも、その子の本当の両親が私の前に現れて……私は……」

沈痛な表情で、ウルトリイさんも自分に向けて首を振った。

一瞬だけ、ウルトリイさんはファミイルに顔を向け、そしてハクオロに寄り添った。「あなたが本当の力を解放されたなら、たとえ大封印の力を持ってしても、私たちにあなたを止める術はありません。しかしハク様……」

言われるまでもなく、分かっている。

しんのすけの本当の家族が現れて、そして今日の前にしんのすけが元の世界へ帰る方法があり、逆にこの機を逃せば帰ることができなくなることに。

「あなたはその子を……自分の本当の子のように……ですが、だからこそあなた様ならば理解されているはずです。しんのすけにとつて、何が最良なのかを……」

しんのすけにとつて、何が最良？ ああ、分かっているとも。

家族と一緒に、本来の生きるべき世界、生きるべき時代、そして帰るべき場所へと帰ること。

「……しんのすけ……これ、やるよ」

瞳が熱くなるも、それを懸命に堪えながら、自分は精一杯の笑顔を見せながら、自分の纏っていた衣を一枚脱ぎ、それをしんのすけに手渡した。

「おおお、なんなんだ、これは？」

「神様の衣だ……すごい貴重なんだぞ？ それを誰かにやるのは……惚れた女以外で、



お前が二人目だ」

「ほうほうう……でも、全然流行にのつてないぞ？　なんだか、ジジ臭いぞ」

「ば、ばか！　由緒ある代物なんだから大事にしろ！　それで……それを纏えるぐらい、大きくなって……デッカイ男になれよ、しんのすけ」

大神となった自分が最初に纏っていた衣装は、クオンに渡した。

その後、ウルウルとサラアナが新しいのを作ってくれたが、それを今度は、しんのすけに自分は渡した。

貰った衣を微妙そうな顔で受け取るしんのすけに苦笑していると、しんのすけは何か思いついたかのように車へ走った。

「そうだ、オラもなんかハクとーちゃんにあげるぞ。とーちゃん、かーちゃん、オラの荷物なんかある？」

「ああ？　わかんねー。とりあえず、家にあつたものを手当たり次第に持ってきたから……」

「おおおお！　オラのオモチヤ箱があつたぞ！　そだ、だつたら……んくと、んくと、……おつ、これだ！」

車の中をゴソゴソと漁り、何かを見つけたしんのすけは駆け足で戻ってきた。

そしてしんのすけは、その手にある一冊の汚い手作りの本を渡してきた。

「しんのすけ……これは？」

「オラが作った、『ぶりぶりざえもんの冒険』、だぞ」

「ツ、な、なに！」

驚いた。確かにそこには汚い手書きの絵だが、紛れもなく今この場にいるぶりぶりざえもんの絵が書かれていた。

そして、「ひらがな」でしつかりと、「ぶりぶりざえもん」と書かれている。

「これ、ハクとーちゃんにあげるぞ。ハクとーちゃんとクオンちゃんの子供に読ませてあげたらいいぞ」

「ああ。ありがとう、しんのすけ。読ませるよ。聞かせるよ、子供に……何度も」

それは、汚い子供の落書きだ。でも、確かにこれは、「しんのすけが居た」という証拠であり、かけがえのない絆。

「しんのすけ、自分は……頑張るよ。お、お前のとーちゃんとかーちゃんみたいに……お前みたいなお子供を育てられるぐらい……立派な親になるから……」

「おっ？ 何言ってるの？ ハクとーちゃんは、お馬鹿でお下品だけど、もう立派だぞ？」

……ほい！」

「ッ！」

「ほら、ハクとーちゃん、立派なチンチンだぞ」

この、クソガキが！ 何で今、そんなことを……純粹な目で、当たり前のように言うんだよ。

自分の股間を握ってくるしんのすけに、ゲンコツの一つぐらいしてやりたいのに、どうしても出来なかった。

そしてしんのすけは、急にガニ股になり、

「じゃあ、ハクとーちゃん。最後は……男の誓いだぞ」

「……男の誓い？ ……ああ、あれか」

「そう、男同士のお約束！」

思わず笑みが零れた。

それは、まだしんのすけと出会って間もないころに教えてもらった、しんのすけ流の男の誓いの作法。

「ふんっ！」

ガニ股になって中腰になる。そして拳をクイツと下から上げるといふ妙な動作。

しんのすけいわく、自分の住んでいたところでは、あつちでクイクイクイ、こつちでクイクイ、みんなやっているとのことだが、どこまで本当なのやら……

「これでよし」

「ああ、これでいいな」

でもまあ、いいか……

「……お、おい、しんのすけ！ そのよ、よくわかんねーけど……そろそろ帰らねえと！」

「しんちゃん、早くッ！」

その時、ゲートの光が徐々に弱まっているのが分かった。

チラッと見ると、ぶりぶりぎえもんの下半身は既になくなっていた。

「ぶりぶりぎえもんッ！」

「……私はまだ十分だ……また……こういう景色を……一緒に見れたのだから

……。じゃ」

自分もう別れの言葉は要らないと、ぶりぶりぎえもんは最後に手だけを上げた。

「いけ、しんのすけ！」

「ほっほーい！」

もう時間がない。自分はしんのすけの背中を押して、両親が待っているゲートへと向かわせた。

「しんのすけくん！ 君には色々と手を焼かされたが……私も楽しかったよ！」

「お父さんとお母さんと仲良くね！」

「元気でやるのです、しんのすけ！」

「しんちゃん、また、いつの日か！」

「しんのすけ！」

「達者でな！ 貴様の技、ケツだけ星人はこの俺もすぐに習得してみせる！」

慌てるように皆も次々と別れの言葉を叫ぶ。

楽しかった。ありがとう。元気で、と。

「あ、あく、みなさん。その、む、息子が色々のご迷惑を……」

「えっと、大したご挨拶もできずに、その申し訳……」

そんな皆の別れの言葉を受けて、何だか気まずそうに苦笑するしんのすけの両親たち。

ああ、この人たちとも酒でも飲み交わしたかったな……

「いえ、あなた方の息子は……最高でした。本当に、楽しかった……」

その一言にすべてを込め、自分はしんのすけの両親に頭を下げた。

そして、ゲートにたどり着いたしんのすけはこつちを振り返り……

「じゃ、そういうことでく！ ハクとーちゃん、みなさん、お世話になりました！ お元気で！ オラ、みんなのこと、忘れるまで忘れないぞー！」

忘れるまで忘れないか。

なら、こつちに関しては無理だ。

「しんのすけ、忘れるまで忘れないなら……自分たちは忘れることはできないな……」

「おっ？」

「だって、そうだろう？ お前みたいな……お馬鹿でノーテンキで恥知らずなとんでもない五歳児のこと、忘れられるわけないだろうっ！」

ああ、ダメだった……

最後ぐらい笑顔でと、ずっと堪えていたものが、今、自分の瞳からとめどなく溢れてしまった。

そして、それが自分としんのすけの最後だった……



「なつ、く、クオン！ 抜け駆けはなしなのじゃ！ ハクよ、余の方が強くて丈夫だぞ！  
子供を生むなら余にまかせろ！」

「はううう、クオンさんも、アンジュ様もずるいです！ うゝゝ、ハク様！ わ、私がハク様の子供を身籠ります！ 安心してください、クジユウリの血筋は子沢山になりますから！」

「はわわゝ、ルルやんも遅しいえゝ。ほな、おにーさん、うちもやえゝ。ノスリはんも欲しいやろゝ？」

「なな、なにを！ い、いや、わ、私は、たくさんと言わずに、一人で……い、いや、二人ぐらいなら……」

「まあ、いいですねゝ。何だか私も子供が欲しくなりましたゝ。ムネチカさんもそう思いませんか？」

「ふ、ファミイル殿！ い、いや、小生も、その子供とぬいぐるみ遊びをしたいとは思いますが……」

しんのすけが自分たちを巻き込んだ嵐の所為で、そんな気持ちにさせられることはなかったな。

あいつが残してくれたもの。あいつが自分たちにやってくれたことを忘れてはなら



ない。

「よしみんな。まずは……自分たちも帰るか！」

ヘタクソな絵本を脇に抱えながら、自分は美しい月夜を見上げた。

「……ありがとな……しんのすけ……こんの、バカ息子が！」

そして数年の月日が流れた。

エンナカムイで静かに過ごす、オシユトルとネコネの母であるトリコリの家に、二人の赤ん坊を抱きかかえたネコネが訪ねた。

「母さま、遊びに来たのです」

「あらあら、ネコネ、いらっしやい。まあ！ 今日、シンとヒマも連れてきてくれたのね」

「はいなのです。兄様やあのたぐさんの母親たちには二人をお任せできないのです」  
「ふふふ、すっかり、ネコネもお姉ちゃんね」

「はいなのです。まあ、法の上では、叔母になるので複雑なのですが……」

ネコネに抱えられている二人の赤ん坊は、ネコネにとっては甥と姪。

「今日あの子は？」

「また、姉さまたちの争いに巻き込まれているのです」

「まあ、大変なのね、相変わらず」

母との何気ない会話を交わしながら、二人の赤ん坊をネコネが床に降ろした瞬間、二人の赤ん坊は素早いハイハイでトリコリの元へと駆け寄った。

「あういうああ！ ばーぶばー！」

「ばぶあー！ ばぶあー！」

「はいはい。おばーちやまですよ〜」

駆け寄った二人の赤ん坊を優しく抱き上げ、微笑みかけるトリコリはとても愛おしそうに二人の赤ん坊に頬を摺り寄せた。

祖母の温もりと愛情を嬉しそうに、二人の赤ん坊は心地良さそうに笑った。

その様子に、ネコネは思わず笑みが零れた。

「まったく、シンもヒマも、すっかりおばーちゃんっ子になってしまったのです。正確に

は、母さま限定ですが」

「そうなのかしら？」

「はいなのです。ちなみに、トウスクールは、たくさんの祖父や祖母の方たちが、二人を猫可愛がりして構いますので、二人ともうんざりして嫌になつて居るのです」

「あらあら、可哀想に。でも仕方が無いわよね。二人とも、こゝんなに可愛いんだから」人懐っこく、赤ん坊でありながら活発で、そんな二人はヤマトとトウスクールからは宝のように扱われていた。

しかし、そんな二人が最も心落ち着けて機嫌よくなるのは、この穏やかで温かい祖母の家だというので、多くの皇族関係者たちがトリコリに嫉妬していたのだった。

「ふふ、さあ、シン、ヒマ、今日は何をして遊ぶの？ ムネチカお母様の作つてくれたぬいぐるみ遊び？ フミお母様みたいにお歌がいいかしら？」

二人の孫に微笑みかけるトリコリ。すると、二人の赤ん坊はハイハイで部屋の隅にあつた一冊の本を手に取り、それをトリコリに差し出した。

「あらあら、またこの絵本？ 本当に好きなのね、二人とも」

「「キャお！ キャお！」」

手渡された絵本を広げると、赤ん坊は急かすようにトリコリにしがみ付き、絵本の中をワクワクした表情で見入る。

「ふふふふふ、ネコネがこの本を翻訳してくれて助かったわ。こんなにこの子達が好きになるんですもの」

「はいなのです。でも、苦労したのです。この本の原作が神代文字だっただけでなく、原作者の文字が異常なまでにヘタクソでしたので、解説に苦労したのです」

その絵本に描かれた、一匹のブタの絵。

どこまでもヘタクソな絵で、しかしどこまでも温かく、そして世界を変えた存在の物語。

「昔々、おじいさんとおばあさんがあちこちにいましたが、ぶりぶりざえもんというブタは1匹しかいませんでした」

その物語はこれからもずっと、うたわれる。